

第八章 船橋インターハイ

平成十七年度の三年生

高岡（長与二）杉野（熊本）小野原（岩屋）ジャトウ（セネガル）

一 新車

平成十六年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 高岡 杉野 泉谷 大宥 ジャトウ

【案内文書】

新チームのキャプテンは高岡にします。よろしくお願いします。

今月と来月は息つく暇がありません。

一〇月〇二日（土）・〇三日（日）・一〇日（日） 県下総合選手権

一〇月十六日（土）・十七日（日） 長崎地区新人戦

一〇月二二日（木） 国体出発 二八日（木）

十一月〇五日（金） 県下駅伝大会（前川・小野原・高岡・岩永姉？）

十一月十三日（土）・十四日（日） 九州総合選手権大会

十一月二〇日（土）・二二日（日） 県下新人戦

特に、三年生を含めた試合でも二年生以下の新人チームでも戦力となっている高岡・杉野・泉谷・大宥の四人には過酷な期間になります。そうした中でジャトウの足首痛の回復の様子を見ながら国体ではチームを最高のコンディションに持っていかなければなりません。調整にはとても気を使います。

それに加えてこの時期は三年生の進路決定と次年度のリクルートという仕事が重なります。三年生の進路決定については、本人の希望と先方の申し出を調整しながら本人にとって最高の進路を用意してやらなければならぬし、リクルートについては高校と中学の校長会の申し合わせで、十一月一日以前に本人や保護者と接触することはならないという取り決めがなされているために、具体的な動きを封じられたまま来年の見通しを立て、無駄なリクルートをせず、本命を他校に持って行かれないような対策をいろいろ用意しなければなりません。

数年前、インディアナ大学のヘッドコーチ（キャシー ベネット）が「山崎コーチ、私がアメリカの中学生を見つめるから鶴鳴に連れて行って育て、インディアナに戻してよ」とまじめに言った気持ちがよくわかります。コーチにとって、確実に戦力になる選手が毎年必ず一人は獲得できるという保障があるというのは何にも代え難いほどありがたいことなのです。そんなこんなで、新チームの選手にとっても私にとってもこの時期は非常にハードな期間です。

【結果報告】

高岡・杉野・泉谷は少々疲れ気味みたいです。この三人はパフォーマンスが低下しています。身体的疲労ではないでしょう。それほど体力を消耗するような練習はしていませんから。多分アタマが疲れているのだと思います。精神的疲労と言わずに「アタマが疲れている」と表現したのは、アタマの疲労と精神的疲労は違うものだからです。

精神的疲労というのは人間関係のゴタゴタから来るストレスなど、本来仕事（プレイ）をこなしていく上で必要なエネルギーを使わされるのが基になっています。アタマの疲労というのは、試合や練習中の現状分析をすばやくしなければならぬのに、それができないために仕事（プレイ）に追われるのが基になっています。

これは脳の中に形成されている分析回路が貧弱なために起こることなのですが、回路を増やす唯一の方法は日常生活の中で自分の目に飛び込んでくる情報を「なぜっ」「どうして？」「という目で見る回数を増やす

ことです。でも、それをやったからといって回路は形成されません。そういう目で見た自分なりの思いをこ
とばや動作で表現する努力をし続けなければなりません。その到達ラインが年々下がってきています。
若者の中に年々指示待ち族が増えています。鶴鳴の選手たちも例外ではなくなりつつあります。ですが
ら、バスケットボールを本格的に教える以前にそのラインを引き上げる作業に取られる時間が年々増え続け
ています。一九八五年（昭和六〇年）一月二三日付け朝日新聞のコラム「監督一代」の一節に「がまん
して根気よくしつけを続けられれば、半年も過ぎると新入生の顔から幼稚さが消える」と書きました。が、今は
新入生の顔から幼稚さを消し去るには半年では足りなくなっています。

昔は日本全国が貧乏だったから、こどもたちは普通の生活をしていく中で「辛抱する」とか「他人を思い
やる」とか「克己心」を身につけていきました。今はおとなが意図的にそれをこどもたちに教え込まなければ
ならない時代になっています。ここ数年、新聞紙上で「不景気」という文字を見ない日はありません。し
かし、今の日本は経済の危機だけでなく教育の危機でもあると私は思います。これは学校だけでは解決でき
ません。すべてのおとなが一丸となつてこどもたちを育てていこうと思わなければ脱出できない危機だと思
います。

【戦評】

鶴鳴には覇気がなく、長崎西には善戦で良しとする雰囲気は漂ってしまつた。面白くない試合だった。
第三ピリオドに長崎西がゾーンプレスを仕掛けて二本ほど引っかけに成功したが、それとてゾーンプレスに
勝負をかけ、是が非でも逆転勝利に結びつけようとする思いは感じられず、引っかけたことに満足してい
る感否めなかった。だから、逆転可能な点差でありながらこれといった事件が起きないまま試合が終わり、
プロ野球の消化試合のようなつまらない試合になつてしまった。

平成十六年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 高岡 杉野 泉谷 大窪 ジャウトウ

【案内文書】

私は二〇日（土）の朝入院してその日の午後に膝の手術をします。MRI検査の結果大腿骨骨頭軟骨損傷、
膝蓋骨正中部軟骨欠損傷、内側半月板の縦断裂及び横断裂だということがわかり、シーズンが終わってジ
ャウトウを帰省させたあと手術する予定でしたが、関節ネズミが隙間に入り込んだまま出てこないのので二月ま
で待たずに手術することにしたのです。たぶん走り過ぎだと思えます。

なぜこの日を手術日に設定したのかというと、医師の都合と私の都合を合わせると、空いている日がこの
日しかなかったからです。私の都合はわがままです。榎林ドクターの手術日は水曜日の午後と決められてい
るのですが、平日の手術は短大の授業を絶対休講にしたいから土日しかダメ。月曜日は新人戦の決
勝戦なので、月曜日の朝には退院したい。この条件を榎林ドクターは全部呑んでくれました。

したがって、二二日の朝には退院します。そして、準決勝と決勝には間に合います。鏡視下手術は通常約
一週間の入院なのですが、榎林ドクターは「山崎先生なら一泊二日で大丈夫だろう」と言ってくれました。
というわけで、初日と二日目は三根氏に引率とベンチをお願いしています。よろしく願います。

九州総合選手権では中村学園も鶴鳴も新入生で臨み、揃って熊本国府に負けました。中村学園の新チーム
は国体優勝の主力である中山・藤吉・森がスタメンです。松井・斎藤・反町も中学時代に充分キャリアを
積んだ選手です。鶴鳴のことについては九州総合選手権の案内文書に「高岡が国体の東京戦と福岡戦ともに
充実した気持ちで試合ができ、泉谷も福岡戦の大事どころで岩永のつなぎができたので、それが新チーム
の精神的な支柱なるだろう」と書きましたが、中村学園も鶴鳴も、そんな選手を擁しながらちよつとした出
来事に脆さを暴露し、試合の主導権を維持することができませんでした。

代が替わつた直後はよくこんな現象が起きますが、たとえそれが一年生であろうとも、ビッグゲームで仕
事ができた選手がこのようにパフォーマンスダウンすることを私は容認できません。この大会だけでなく、
ウインターカップまではずっとディフェンスの強化を続けませんが一片の妥協もしません。ちよつとした緩み

でも徹底して追求します。ジャトウにさえディナイ、プレッシャー、チェイスを要求するのですから、のんびりした顔で練習に参加するようなヤツは地獄に突き落とします。

【結果報告】

二〇日(土) 午後一時十五分手術開始。 同二時二五分終了。

二一日(日) 午後〇時十五分退院。

二二日(日) 午後二時三〇分の西海学園戦からベンチ采配。

内視鏡で見た私の左膝の中はメチャメチャでした。膝のサラの内側や大腿骨の軟骨表面は通常ゆでたまご状態なのですが、度重なる摩擦や衝撃でゆでたまごの表面がささくれ立ち、まるで海藻がびっしり生えているようになっていて、ちぎれた繊維がゆらゆら揺れていました。関節の隙間に引っかかっていた犯人は、サラの内側が大きくえぐれてぶら下がっていた軟骨でした。あの画像を見たら「治ったらまた走るぞ」という気持ちには今のところなりません。

ホームページでも述べましたが、早期退院で一番心配されるのが安静期間の短縮による髄液漏れなのですが、私の場合は超短縮で退院したので腰部麻酔の針の穴から少し髄液が漏れたのでしよう、二二日の最終日は少し頭が重かったのでこの結果報告をまとめたあと、二三日はまる一日安静にしておきます。

九月十四日のグラウンドトレーニングの途中に足を傷めてから約二ヶ月間チーム練習には参加せず試合に出ていたジャトウが、少しずつよくなってチーム練習に参加し、スクリメージもフルに出場するようになったのが十一月十五日。しかしその翌日、また同じところを傷めました。右足踵腓靭帯の炎症と足底筋膜炎なのですが、腰高で足幅の狭い着地がなかなか直らないジャトウには、このようなちよこちよこした傷害はこれからもずっとついて回ると思います。

試合は、ウインターカップに向けて一人でも多く戦力として計算できる選手が出てきて欲しいという思いで一人ひとりをチェックしましたが、上級生とともにコートに居るときはそこそこプレイできても下級生だけの中では誰もがまだ不安定です。下級生に本当に力がついてくるのは、本当に三年生がいなくなってしまう一月のエイト大会からかなあと 생각합니다。

鶴鳴の下級生が特別自主性がないというのではなく、本当に自覚が芽生えるのはこの下級生も「これはいよいよ私たちだけになってしまったんだ」という現実を目の前に突きつけられてからなのでしょう。

【戦評】

鶴鳴はジャトウに頼るだけでなく、ジャトウをうまく利用して各選手が点を取り、バランスのよい攻撃で試合を進めた。一方長崎西は納富が高い位置で長い時間ボールをキープし、機を見てインサイドでパワープレイを試みる川上にパスを入れるという攻撃方法で攻める。

この展開は第三ピリオド終了まで変わらず、それがなかなか成功しないので点差は開くばかり。しかし、ジャトウがまるまる出なかった第四ピリオドだけで長崎西は二九得点を挙げ、鶴鳴はわずかに六点しか取れないという試合展開となった。

これを両チームの選手たちがどうとらえているか。それが一月のエイト大会の試合に出るだろう。どうとらえているかというのは、長崎西の選手たちが「ジャトウさえいなければ私たちの方が上だ」と思っているか、鶴鳴の選手たちが「ジャトウが居なければ私たちは何もできない」と思っているか「勝ちはずだ」と思っているかということである。

勝負というのは当事者にしか分からない事情や心理がある。一月のエイト大会はお互いの思いがさらなる高みを目指し、一回と磨きがかかった充実した試合になることを期待する。

文責 山崎 純男

平成十七年〇一月 九州春季二次予選 優勝 スタメン 高岡 杉野 泉谷 大窄 ジャトウ

【案内文書】

七日に正月合宿が終わり、翌八日には試合案内を送るつもりでしたが、ジャトウたちの帰省の手配作

業が切羽詰まってきて他の仕事に手を付ける余裕がありませんでした。この仕事は昨年十一月からかかっていますが、なにしろ八人のセネガル人留学生の帰省の世話をしなければなりませんし、留学生の中にはセネガルに帰らずにイタリアのおじさんの家に行くとか、スペインの知人の家にホームステイするとか、ビザの申請には両親のサイン入り承諾書が必要なのに離婚したので両親のサインが揃わないとか、いろんな問題を抱えて私の頭はパニック状態です。あと一ヶ月後に帰省するのにまだ段取りがついていない作業もあり、一休みというわけにはいかないのですが、ちょっと中断してこの案内書に手を付けている(十一日深夜)ところです。

三日から七日までの合宿は散々でした。なんとかあったのは三日の午前中だけ。以後は日を追う毎に動きが鈍くなり、合宿が終わる頃はまるで夢遊病者のようにコート上をウロウロするばかり。高岡はウィンターカップで少し無理をさせたので疲労骨折とジャンパーズニーが少し悪化し、この合宿は全欠でした。しかしそれはたいした問題ではありません。問題だったのは、チームが失速し始めたら体力的にまだ大丈夫だろうと思われる選手まで右へ習えでみんな失速してしまったことです。

抗う。これは若者の特権です。理不尽なことに徹底的に立ち向かう態度。大人に対する理由なき反抗。近頃の成人式で見られる若者の無軌道ぶり。それらはみな、事の是非はともかく若者たちの体内にあるエネルギーの噴火です。スポーツを見る人たちは、このような若者のエネルギーが正しく噴火するさまを見たいのです。だから私は、鶴鳴のユニフォームを着る者には何よりも先に「抗う」ことを求めます。

そういう意味で、この合宿では「みんな潰れても私は絶対に潰れない」と、そんな気概を持った選手がひとりでもいいから生き残って欲しかったのです。試合を前にこんな愚痴めいたことを言うのは選手の士気に悪影響を与えるのではないかと危惧する人もいるでしょうが、それならそれで仕方ありません。私は、選手たちが私のことばを真摯に受け止めて、見る人たちに「やっぱり鶴鳴の試合はおもしろいよ」と思っただけという気持ちで戦ってくれることを期待します。

【結果報告】

九月から十二月まで足底筋膜炎でチーム練習から遠ざかっていたジャトウは正月合宿から合流し、今回の試合もフルタイム出場しましたが、ジャンパーズニーの痛みがなかなかとれない高岡は正月合宿も全欠で今回の試合は出場時間を調節しながら出て貰いました。そうしなければ県内の準決勝以上や九州大会レベルに出せる選手が、高岡・杉野・ジャトウ・泉谷・大窪の五人ギリギリしかないからです。

高岡の膝は、国体後ディフェンスの強化を図るために少しディフェンス面で注文が多くなったのが原因です。フットワークメニユーや練習時間が長くなっただけではありません。練習内容がハードになったり、練習時間が長くなったり、オフが少なかったりすると身体的にも精神的にも障害が発生しやすくなりますが、スポーツ医学を勉強し続けてきた私は、練習のやりすぎで選手を壊すようなバカなことを今はしません。

それでもたまにはこのような障害が発生します。でも、私としてはギリギリ譲れるところまで譲っているのでこれ以上の妥協はできません。これから三月の春休み遠征までに少々のことでは壊れない身体と心を作らなければならないので、選手もそのことは覚悟しておいて欲しいと思います。

ところで今回、泉谷にはかわいそうなことをしてしまいました。入学当初から、泉谷は時々手を抜くということを発見した私はそれを直そうと思っただけでなく見守ってきました。ところが今回の試合はそれが目に余るんです。ディフェンスでは手を抜くしオフフェンスでは振り切れるはずの相手にスティールされ、まったくダメなんです。

「貴様コノヤロー！何度同じセリフを言わせるんだあ！」と、怒鳴りつけましたが、決勝戦の終わり頃「ひよつとしたらバテてる？」と思いました。で、試合が終わった後私は泉谷に「お前体調悪かったのか？」と聞きました。「いいえ」といっているので「ひよつとしてバテていた？」と聞いたら少しためらってから「はい」と答えました。小学生の頃から泉谷をずっと見てきた私は、彼女は不死身だと思っただけでいきました。泉谷とて人間です。機械ではありません。時にはバテたり落ち込んだりしますよね。

【戦評】

十一月の県新人戦で、長崎西はミスマッチを突いた川上のインサイドブレイで徹頭徹尾攻めたが不発に終わった。さればと今回は、ジャトウがディフェンスに戻る前に攻めきってしまおうと、シュートを決められたあとモアリーオフェンスを攻撃の軸にした作戦に出た。が、ジャトウを抑えようとすれば無理をするから体力の消耗も激しいしファウルも嵩むので次第に失速。やはり鶴鳴の足下をすくうことはできなかった。

しかし、一昨年のジュニアオールスターで優勝した長崎県代表は平均身長一六〇cm、一七〇cm台は一人もいなかった。それでも優勝した。平成八年のインターハイでも平均身長一六四cm（決勝戦の相手の桜花学園とは一〇cmの差）の鶴鳴は決勝進出を果たした。小さければ動きの速さと量で勝る以外にない。それを見事に実践した実例である。

平成十七年度はジャトウにとって最後の年になる。もう二度とこのような選手が長崎県のどこかのチームに入ることはないだろう。あと一年、「どこにも負けない練習量でジャトウを潰してやる」という気概を持ったチームが現れれば、間違いなく長崎県のバスケットボールはレベルアップすると思う。文責 山崎純男

平成十七年〇二月 九州春季選手権 二回戦 スタメン 高岡 杉野 泉谷 大窄 ジャトウ

【案内文書】

この大会は次年度に備えてとても重要です。この大会の結果が六月の九州大会のシードに繋がり、それがインターハイと九州国体のシードに繋がるからです。昨年のこの大会は正月明けてからずっとジャトウが練習にも試合にも集中できず、大分鶴崎に一〇八対一〇六で負けてしまいました。この大会直後に初めての帰省をさせることになっていたのでそのことばかりが気になっていたので。

今年はこの二ヶ月ほど母親がイタリアに居てセネガルには不在なので、セネガルではなくイタリアの親戚の家で母親とともに過ごす予定でしたが、イタリア領事館がイタリア滞在ビザを発給してくれないので帰省を取りやめました。帰省取りやめという決断はジャトウが自ら下したことなので落ち込んではいません。むしろ、自分の将来を考えて、帰省をするよりお金を貯めておいた方がいいと思っています。帰省費用はすべてジャトウの預金通帳に振り込んでやりました。

ウィンターカップ以降ジャトウのプレイスタイルを変えています。帰省をしないのでじっくり練習できません。どう変えるのかというと、ゴール付近で固定的に使うだけでなく、オールラウンドに動き回り、シュート範囲を広げるのです。それに伴って、バスケットがまったく分からないままとりあえず試合に出してきた一年生にもモーションオフENSEを教え込んでいます。その成果をこの大会に披露するには時間が足りないとはいませんが、春休みまでには試合の中で活かせるようにしたいと思います。

プレイスタイルを変えるのは、インターハイとウィンターカップにはジャトウは出場できるが国体には年齢制限のために出場できないからということと、新入生の長身者を春休みからローテーション入りさせたいからです。

【結果報告】

大会出発前の一〇日（木）。練習が始まってすぐ私はジャトウをコートから追放しました。ジャトウは最初のメニューであるフットワークをしないで見学しているのです。「お前、どうしたんだ？」と私が聞くとジャトウは「足が痛むんです」と答えました。私は黙っていました。フットワークが一通り終わると次はスリーメンブレイクです。それにはジャトウは参加しました。

一本目は黙って見ていましたが二本目の途中で私はジャトウを呼びつけ、「お前、コートから出る！俺は全力で練習しないヤツは見たくない」と言いました。ジャトウは「わかりません。どうしてですか？」と聞きます。「俺は痛いのがまんして練習してるんだという態度の選手は見たくないんだよ！」と怒鳴りつけたら寮に帰りました。

翌金曜日は九時から十一時まで練習して出発です。その日の練習も私はジャトウに、「お前はチーム練習に

入らなくていいから個人でフリー練習をしておけ」と言いました。ジャトウは「やります。大丈夫です」と言います。私は「今更何を言ってるんだ。昨日あんなに痛そうにしていたのが今日急に良くなるわけないだろ?」と言いました。そして、

「お前は昨年の九月に足の裏と足首を傷めてからそれが長引き、国体もウィンターカップもぶつつけ本番だった。それがずいぶん改善されたから正月合宿からチーム練習に合流してこれまでやってきた。しかし、おそろくまた痛みがぶり返してきたんだろ。そして、試合の直前になってハードな練習から外れた。もし痛みがぶり返してきたのなら試合の直前ではなく、もっと前に練習をセーブして本番では痛みを引きずらないように調整しなければならなかったのじゃないか?俺には、試合直前のお前のパフォーマンスは、試合で自分の仕事が出来なかった時のための言い訳づくりをしているようにしか見えないよ」と付け加えました。

私はジャトウがふてくされて試合をボイコットしてもかまわないと思っていました。それならそれで契約を破棄して強制帰国させればいいのですから。しかしジャトウは、ふてくされもせず素直に個人練習をしてみんなと一緒に北九州に向かいました。

オフエンスはジャトウを固定的にハイポストからペイントエリアの合わせプレイだけで使うシステムを撤廃し、ジャトウもモーションオフエンスのコマのひとつとして使うために移行中です。でも、ラマのクイツクネスにジャトウは太刀打ちできないので新スタイルでは何もできませんでした。

【戦評】

慶誠は終始ハーフコートのマンツーマンディフェンス。鶴鳴は一試合通してガードと他の選手を切り離すトライアングルツーの変則ディフェンスを布いた。試合はどっちが主導権を握っているのかわからないまま終盤へ。残り七分から五分の時間帯で鶴鳴がドラウトに陥った間に慶誠はラマがらみで原田・原田・大和・原田の得点で逆転に成功。

しかし土壇場で鶴鳴も高岡がろうじてスリーポイントを決めて観衆を沸かせた。が、踏ん張ったのもそこまで、残り二分を切ってからブツンと集中力が切れた鶴鳴はまたもや原田・大和・原田の得点で振り切られた。あれだけ好き勝手にラマと原田に打たせてこれだけ競り合ったのなら、もう少し守れば鶴鳴はなんとかなったんじゃないかと、第三者的にはクビをかしげたくなくてもおかしくない試合だった。

勝負の裏にはどんな事情や心理があるか当事者しかわからないということは前に述べたが、この試合に関する限り、目に見えた現象としてはラマのスリーポイント二発と、ジャトウが前半ですでに四反則になったことが双方のチームの作戦遂行に大きな影響を与えたと言えるだろう。 文責 山崎 純男

【関東遠征・徳島遠征】

三月二七日～三〇日 関東遠征

対戦チーム

市立柏・盛岡白百合・東亜学園・佐久長聖

倉敷翠松・昭和学院・京都明德・札幌創成

山村学園・土浦日大

スクリメージ 十二本 九勝三敗

四月〇一日～〇四日 徳島遠征

対戦チーム

徳島城北・福井商業・神村学園・新居浜商・

スクリメージ 二三本 二〇勝三敗

コメント

この春の遠征は、新入生の判定のために上級生の出番が少なくなった。出番が少なかった上級生がダメだというわけではない。特に、熊本の桜木中から来た浜本（一六九cm）のスピードとジャンプショットの安定性は絶品である。関東遠征では全試合二四〇分のうち一九七分出場させ、徳島遠征では全試合四五〇分のうち三〇一分出場させた。関東遠征では十二本のスクリメージすべてがスタメン。徳島遠征では二三本のスクリメージのうち十七本がスタメン。徳島でのスタメン回数と出場時間が関東遠征より少なくなったのは、未

熟だったからではなく、ケガをさせるのが怖くて控えめにしたからである。

平成十七年〇四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 高岡 杉野 泉谷 浜本 ジャウトウ

【案内文書】

三月二六日から三〇日までジャパンエナジーで合宿。引き続き三一日から四月四日までは徳島城北高校で合宿しました。平成三年以前はジャパンエナジー合宿だけでしたが、平成四年に国体強化のために徳島に立ち寄ってくれと頼まれてからずっとこのパターンが続いています。

行きは新門司から神戸まで夜間フェリーを使いますが、帰りは常磐道 東名 名神 神戸淡路鳴門道 徳島合宿 高松道 瀬戸大橋 山陽道 九州道 長崎道とずっと陸路です。帰路だけで一四〇〇kmの旅です。誰から「選手も大変ですわねえ」と言われますが、遠征は荷物が多いので一人ひとりが荷物を持って乗り換えや会場まで移動する大変さを考えるとむしろ楽です。こうして自力で移動するので経費がかからず、選手からは一円も徴収しないで遠征ができるので、総合的に考えるとむしろこの方が選手にかかる負担は軽いと思います。

というわけで、総合的には負担は軽いかもかもしれませんが長い遠征ですから選手の体力の消耗は激しく、毎年徳島合宿はへロへロになって試合をしています。しかし今年の上級生は楽でした。点差が開いた試合でなくとも新入生を投入できたからです。特に浜本はみんなの注目の的でした。若いのでたくさんミスをします。がタイミングよくミートできた時のドライブは誰も止められません。

影井と磯野は予想通りの出来でしたが予想外だったのが上田と川瀬です。高校の県代表クラスとの試合で使えるようになるには少し時間がかかるだろうと思っていましたが、なんとなんとちゃんと仕事ができるのです。長松は膝の手術（中学時代）後のリハビリのためにデビューまでには時間がかかると思いますが今年の新入生はポジションがダブルらずにそれぞれ戦力として計算できるというのが上級生にとっては本当に助かります。

特に、キャプテン高岡はホツとしているに違いありません。彼女は何をやるにも目一杯がんばるので余裕がなく、自滅ブレイはするし、無理するので故障が絶えません。昨年は本当にかわいそうでした。今年は一息つかせる時間を作ってやれそうなので安心してブレイをして欲しいと思います。ま、春休み遠征では仕事ができたと新入生たちもそのうちボロが出てくるとは思いますが、昨年よりはグンと層が厚くなったことは間違いありません。ケガさせないように大切に育てたいと思います。

【結果報告】

一日目は新入生にとって初公式戦だったのでさまざまな体験をさせるために二年生の控え選手の出番はありませんでした。二年生も昨年はまったく同じ扱いをして貰ったですからこれは当然です。こうして新入生を使いながら私は細かいチェックを入れます。「この選手のここは使える」「この選手のブレイを直すのは骨が折れそうだ」「この選手にはこんな技術を身につけさせなければならぬ」「なごなごです」。

二日目は新入生の体験学習と出番の少ない選手に出番を回してやる二本立てです。二日目を終わったところ、ランクが下がった選手や高校総体エントリーを確保した選手など、少し変動がありました。鶴鳴バスケットには、タッチやH2（どちらも高校球児マンガ）のような青春ドラマはありません。大学生の就職活動やアフリカのサバンの弱肉強食と同じ厳しい現実があるのみです。

自分を売り込めない者は置き去りにされるし、相手に威圧感を感じさせない選手は餌食になります。でも鶴鳴バスケットが大学生の就職活動やアフリカのサバンナと違うところは、スタートラインに立った時に、遅しい者も自力では生き延びられないようなひ弱な者も、平等に手が差し伸べられることです。それを受け入れた者、聞き流した者、それぞれに一年後二年後結果が出ます。新入生にとってこの二日間はこれまでの人生で初めての厳しい洗礼を受けたはず。しかしそれも、本人が人生最大の試練と思っているか中学のバスケットとの延長と想っているかの違いで三日目以降の人生がまた違ってきます。

三日目の準決勝全部と決勝の第一ピリオドまで私は指揮を執りましたがその後はベンチを三根さんに頼んで短大に戻りました。月曜日は午後から二コマ授業が入っていたからです。ですから最後の試合の流れがどうだったのかはわかりません。でもスコアだけから見るとふがいない試合だったようです。

スコアを見て残念に思うのは、決勝では新人をほとんど使えなかったということです。上級生が下級生にバトンタッチできるだけの十分な点差をつけてやれなかったからだと思いますが、これも上級生が「とんでもないことをやってしまった」と思っているか「優勝したよ」と思っているかで今後が違ってきます。

【選評】

準決勝

純心対長崎西戦は、ステージから観ている限り純心は伸び伸びやっているように見えた。

鶴鳴対長崎商業戦は、鶴鳴の新人が入れ替わり立ち替わり試されていた。

両方の準決勝から長身の新人選手を捜したがどれも即戦力としては期待できない。鶴鳴の影井が一七六cmながらアウトサイドのプレイができるので九州国体に向けてジャトウの穴埋めに少しは役立つかもしれないが、それとて大黒柱にはなれない。

そうすると、ジュニアオールスターで活躍した選手たちを中心に小粒の選手で九州国体を乗り切らなければならぬが、どのチームを見渡しても「この選手で行ける！」という選手はいない現二年生は超小兵軍団でジュニアオールスター優勝だったはずだが…。自覚不足か訓練不足のどちらかだろう。国体を狙う選手たちが、中学までの財産だけで高校でも一仕事しようと思っっているなら今すぐ改めて欲しい。これから八月までに、小兵軍団だけで九州を突破する力を身につけなければならないのだから。 文責 山崎 純男

【倉敷遠征・福岡遠征】

五月〇三日～〇五日 倉敷遠征

対戦チーム

倉敷翠松・徳島城北・福井商業・小林高校・慶誠

慶進

スクリメージ 十一本 九勝二敗

コメント

マネージャーの与那嶺が急に体調不良でキャンセルになったので、出発前夜高崎と前川を面接。前川を補充することに決めた。今回はメンバーを厳選。今年の戦力として有用な上級生五人（後に前川追加で六人）と見極めのための下級生五人に絞った。倉敷翠松が強くなっていた。全国ベスト四の力は充分持っていると思う。昨年と違ってバナが本気モードでやっているのがその理由だが、それより周りの選手がしっかりしてきたのが目立つ。自滅で勝利を逃すパターンが多いチームだったがそれも今回はなかった。ひよっとしたら優勝狙いかも…？

五月四日、鶴鳴対慶進戦で、慶進の監督の村谷先生と慶誠のコーチの豊田さんの許可を得て慶誠のラマを鶴鳴チームに入れて一〇分だけスクリメージをした。慶誠チームの中ではラマと周囲の選手の息が合わず、ラマにストレスが溜まっていたのでそれを解消してやるためだ。

鶴鳴の選手にもラマにも「ラマはローポストのパワープレイで勝負させない。ハイポストからミドルポスト近辺に位置し、周囲の選手に一旦スクリーンをかけてからそのあと相手ほ背後を突いて裏パスを飛ばすのをメインにしてやる。ラマが完全に相手の背後に回らなくても、ラマの手が長いしジャンプ力があるので競り合っても絶対ラマがボールを取る。だからパス出しは迷わなくていい」と指示した。

ラマは生き生きとプレイしていた。本気モードのラマはやはりすごい。アメリカのリッチモンド大学から勧誘があったのは当然だと思う。

五月五日、合宿最終日は恒例の山崎クリニック。これまでに岡山では七回くらい講習会をしている。今回はゾーンプレスオフェンス一本に的を絞ってやった。明日から鳥取で中国大会が開催され、倉敷翠松は明日早朝出発する。そんな忙しい中に、平松先生・中野先生・ジナサンはじめ、後援会長の古厩さんや長老の橋

詰さん等多数のご支援をいただいて内容の濃い合宿ができた。感謝。

五月〇六日〜〇七日 福岡遠征

対戦チーム 神村学園・九州女子

スクリメージ 十六本 十三勝三敗

コメント

五日夕方倉敷合宿を終え、六日朝倉敷を発って昼過ぎに福岡着。引き続き九州女子高校で合宿した。倉敷・福岡の合宿で異変があった。マネージャーの与那嶺が倉敷遠征直前に体調不良で参加できなくなったために欠員補充で連れて行った前川が復活した。前川は長崎県の川棚出身で素質充分の選手だが、昨年一月に捻挫して以来、精神的な脆さをなかなか克服できないので戦力外通告を受け、先の春季選手権でもほとんど出番なしだった。運命とは実に恐ろしいものだ。

もし与那嶺が体調不良にならなかつたらこのまま卒業まで戦力外部員だったかもしれない前川が、福岡合宿最終日にはスタメン定着なのだから。たゆまぬ努力で精神面の脆さを駆逐したわけではなく、突然運が巡ってきての復活なので、なにかのきっかけでまたすぐ元の弱虫に戻るかもしれないが、これが本物なら鶴鳴のガードフォワード陣はかなり機動力がアップする。

運命と言えば、こうなった経緯にはもう一つ話しておかなければならないことがある。私は、公式試合にはエントリー外であってもがんばった上級生をご褒美に連れて行くが、上記のような強化遠征には本当に厳しい試合に出せる選手か、将来のために勉強させる選手しか連れて行かない。今回の遠征は選手一〇名とマネージャー一名の計十一名で行く予定だった。公式試合のエントリーは十二名だが、ランキング十一位の高崎とランキング十二位の前川は、厳しい試合には今のところ使えない。それで一〇名だけということになったのだが、欠員補充となれば当然ランキング十一位の高崎（兵庫県出身）を指名する。そこで出発前夜、寮の事務室に高崎を呼んだ。以下その時の会話である。

山崎「与那嶺が体調不良で遠征に行けなくなつたんだよ。お前連休の予定は？」

高崎「帰省します」

山崎「あ、それじゃチケットも取っちゃったよな」

高崎「ハイ…」

ここで私は三秒くらい間を置いた。

山崎「そうか…じゃいいや」と言つて次に前川を呼んだ。

この三秒の間に「でもキャンセルできません」という返事が返ってくれば高崎で決定だったのである。

四月十八日付けの県下春季選手権の報告書で、大学生の就職活動とアフリカのサバンナの例を引用したが、「思っていることを言いそびれた」と思った時はもう運がはるか彼方に逃げ去っている。現実というのは実に厳しいものだ。

【グラウンドトレーニング】

五月十一日。私は選手たちがグラウンドに上がって来る前に走り終え、選手たちの五千^ル走とは一緒に走らずに個々のチェックをした。夜、マネージャーから貰った記録表をパソコンに入力していたら上田のタイムが二四分五五秒となっている。私はマネージャーが周回を伝えるのを間違えたんだと思った。なぜなら、私が計測した数人のラップタイムからして上田は二六分以上はかかるはずだったからである。次回の五千^ル走は上田をテストするつもりでスタートから一緒に走ってみた。

私はスタート時点からキツチリ二五分ペースで走った。選手たちははじめの数周は遅い選手もなんとかトップ集団についていくので私はほとんど置いて行かれる。でも周回が進むにつれて遅い選手が次々と脱落し始める。上田の背中に私が追つたのは二四〇〇^ルを過ぎたあたり。背後から「俺はスタート時点からずっと二五分ペースで走っているぞ」と声をかけると上田はビクツとしてビュツとスピードをあげた。「ほらみる

手を抜きやがって、俺に置いていかれると二五分は切れないぞ」と脅かしながら私はうしろからピッタリついていく。

三千を過ぎると上田の呼吸は荒くなり、スピードが落ちてきた。しかし私はあおらずにそのまま追走し、残り千になってから、「このままじゃ二五分では走れないな、少しスピードを上げるぞ」と言っただけに出ると、上田はヒーヒー言いながらついてきた。あと二百を残し、「最後の一周自力で走れ!」と言って上田を前に出させ、私はあとからついていったが上田はそのまま頑張り、二四分四秒でゴールした。タイムそのものはバスケットボール選手としては遅すぎる。でも、長距離走は超苦手で「やりたくない、やりたくない」といつも思っている上田にしては、今日は人生でもっとも頑張った日になったと思う。ジャトウも長距離走は大の苦手だが、私がこうして一緒に走ってやってもがんばってタイムを縮めようとはしない。

五月十五日はは選手の医科学測定だった。朝七時四十分から夕方六時三十分まで県立総合体育館に缶詰だった。測定は一日十二人が上限である。高岡・杉野・ジャトウ(3年生)・泉谷・大窄・前川・高崎(二年生)・浜本・影井・磯野・川瀬・上田(新入生)を受けさせた。最大酸素摂取量は軒並みダウンしてた。これには理由がある。この一年バスケットボールのノウハウを教え込むのに時間がかかり、トレーニングに手がまわらなかつたからだ。測定の結果が出る前からパワーアップとスタミナアップのメニューが足りないことはわかっていたので、新入生が慣れて来た五月以降、グラウンドメニューを復活させたばかりだが、測定状況を見て筋力トレーニングも復活させなければならぬことを痛感した。今、機動力バスケットの復活を期して体育館ではフルコートプレスとランアンドガンが練習の重要部分を占めているが、それに加えてグラウンドトレーニング(週二回)と筋力トレーニング(毎日)も復活させていこうと思う。

追伸 この日私は六三歳になった。三年前、六〇歳の誕生日記念にトレッドミル走で最大酸素摂取量の測定に挑戦したが、膝の手術後また走り始めたので次回は六五歳の誕生日に挑戦してみたいと思う。

五月二〇日。二月五日に走り始めてから週に平均四日は走り続けてきた。最初はランニングマシンで時速八kmのおっかなびっくりペース。だんだん慣れてきてスピードを上げてきたがそれでも時速十二km以上には上げなかつた。手術した左膝(昨年十一月二一日)にはずっと痛みを感じているし、もしまだ膝が腫れたりして走れなくなつたらイヤだなと思うとなかなか思い切つて走れなかつたからだ。

でも今日のグラウンドトレーニングは最初から選手に挑戦してみようと思ひ、準備運動を入念に行った。記録は二分四六秒。本当にぶつ倒れそうだった。二分四六秒というのは1kmを平均四分三三秒のペースである。最初の2kmは1km四分三〇秒ペースで行ったが、あとの3kmはちょっと苦しくなり1km四分三三秒のペースに落ちてしまった。もう5kmを二〇分台で走れるまでに復調することはないと思うが、「まだまだがんばれるな」ということは確認した。

【佐賀遠征】

五月二二日

佐賀遠征

対戦チーム

佐賀清和・熊本大津

スクリメージ 八本 七勝一敗

コメント

連休で急浮上した前川が午後は沈没と浮上の繰り返し。ウーン…自覚かなあ。いろんな組合せを試しましたが、泉谷・大窄・前川・浜本の四人を同時に使った時の攻防は面白いです。なにしろこの四人の足は男子選手並みですから。でも、浜本は「すごい!」と自滅の繰り返しでふとももが攣るし、連休で急浮上した前川が今日は沈没しかけたりまた浮上したりで、本当にホンモノになるまでにはみんなももっとと苦難を乗り越えなければならぬようです。

【案内文書】

春休み合宿 春季選手権大会 五月の連休合宿と、この二ヶ月間ずっと選手を観察し続けてきました。観点は、「誰をスタメンにしようか、攻防のスタイルをどうしようか、エントリーメンバーの絞り込みをどうしようか」です。

なぜ今年に限ってそんなに悩んだかということ、新加入の浜本と影井をどうしても戦力ローテーションに組み入れたかったからです。彼女らをバチツと鶴鳴スタイルにはめ込もうとすれば彼女らの良さを殺してしまうし、好きなようにやらせれば自滅ブレイが続出します。その調整をするのにはずいぶん考えました。

それにもうひとつ、新入生戦力に加えることによつて、高岡・杉野・泉谷・大宥・ジャトウなど上級生の主力選手が新入生に刺激されて彼女らの良さが発揮されるようなことも考えなければなりません。それにも時間を使いました。

で結局、前川が五月の連休に急浮上してきたので、浜本・前川・泉谷・大宥の足を活かすにはランアンドガンバスケツトから入った方がよいという結論に達しました。そうすれば、高岡のスピードブレイも誘発させられるし、影井や磯野にも難しい課題を与えなくてもリバウンドだけががんばるとかこぼれ球を拾うなどの単純なブレイだけで活躍できる場面が回ってくると思つたのです。でも、終始走りっぱなしの試合展開では強い相手を制することはできませんので、そうしたときに杉野のスリーポイントやジャトウの高さを活かすブレイも用意しておかなければなりません。

県高校総体はいつもそうですが、エントリー決めをするときに主力選手以外をどのような基準で選ぶかということに悩みます。どのような基準といつても二つ（がんばったから「褒美」上級生 将来性を見極めたい⇩下級生）しかなく、特殊な例外を除いて将来性で選ぶのが圧倒的に多いのですが、今年も例年同様将来性優先で選びました。鶴鳴バスケツトは一年目は優遇されますが、その一年間で自己アピールできなかった選手は二年目からチャンスを抑むのが難しくなります。新入生にとっては最初の年が正念場なのです。

【結果報告】

初日の初戦はいつも気を使います。今年は特に浜本と影井のブレイぶりは嚴重にチェックしました。なぜなら、彼女たちは今年的主力組に組み込まなければならぬからです。チェックの結果はふたりとも でした。

二日目のスタメンは足で勝負するメンバーにしました。このメンバーは本当は高岡・泉谷・大宥・前川・浜本になるのですが、それだと小さくなりすぎるので高岡に替わつて影井を出しました。小さくなるからだけでなく、影井には実践から学び取らせなければならぬ課題があるのでそうしました。

二日目の結果からは、新入生はもちろん、二年生の泉谷・大宥・前川も、マラソンに例えるならスタートからとばして引き離すレースになると強いけれども、相手に先頭を譲つて様子を見たり、途中でスパートして揺さぶりをかけたりするレースはできません。無駄なエネルギーを使って息切れする場面がたくさんありました。

三日目は決勝リーグの二試合です。県総体の決勝リーグは相手がどこであれ油断できません。インターハイの本番よりも神経を使います。とりわけ気を使つたのがジャトウと浜本の出場時間です。自滅の前兆が見えたらすばやく替え、ミスがあとに尾を引かないうちに休ませました。こういう神経の使い方が遠征合宿のスクリメージとはまったく違います。

最終日の決勝戦は、泉谷・大宥・前川・浜本・影井のスタメンで臨みました。今大会、高岡・杉野・泉谷・大宥・ジャトウのスタメンと泉谷・大宥・前川・浜本・影井のスタメンの両方を試してきました。その理由は、九州国体には年齢制限のためにジャトウが出られないので足で相手を翻弄するにはどのような組合せがよいか判断するためです。

高岡はもちろん足で翻弄する組に入るので、足がずば抜けて速い泉谷・大宥・前川・浜本に高岡を入

れば小さくなりすぎるので影井を入れて試してみたいです。しかし、この布陣は下級生ばかりになるのでいくら足が速いといっても決勝戦の相手のベテラン選手を封じることができませんでした。でもまだあと二ヶ月あるので徹底的に足づくりをして九州国体に臨もうと思います。

【選評】

鶴鳴は今大会三度目の下級生スタメン布陣。九州国体を睨んで足で稼ぐメンバーを今大会で試してみたい。しかし、動きは速いもののシユートが決まらない鶴鳴は焦ってつまらないミスを重ね、自滅への一途を辿る。やはりここ一番というときには上級生が一人でもコートに居なければ落ち着かないということなのだろう。

それにしても長崎商業はすごい。昨年か一昨年もこの欄で同じ事を述べた記憶がある。ベスト四のうちではメンバーが格段に落ちるのが長崎商業だ。だから新人戦も春季戦も長崎商業はベスト四に名を連ねる二回とも四位だった。それが今回は決勝進出なのである。

山崎コーチは五〇歳を過ぎたベテランコーチである。だが、長崎商業の決勝進出を山崎コーチのベテランの味という簡単なことばでは片付けられない何かがあるはずだ。もしベテランの味をいうことばで片付けるならば、他の若いコーチたちが五〇歳を過ぎたら山崎コーチと同じように、どんなコマを持っても県内トップレベルを常時維持するチームを作れるのか？そうじゃないだろう。 文責 山崎 純男

【後日談】

六月六日。長崎に戻ってすぐ、九州大会とインターハイのエントリー決めの一対一マッチをやった。総体直前までの練習と大会期間中の動向を見て、九人のエントリー（高岡・杉野・ジャトウウ三年生、泉谷・大窄・前川二年生、浜本・影井・磯野新生）は確定したが残る三名が確定していない。そこで、高崎・野村・森・林田・峰の二年生と川瀬・上田の一年生をトーナメントで戦わせ、上位三名にユニフォームを着せ、四位から六位までを補欠またはアシスタントコーチとして九州大会及びインターハイに振り分けて連れて行くことにした。

なぜ高校総体最終日の七日を待たずに予選をしたかという点、二週間後に九州大会があるのでその申し込みに明日書いて明後日の朝出さなければならぬことと、明日は試合後すぐ短大に帰って授業をしなければならぬので予選をする時間が取れなかったからだ。その結果、峰・野村・川瀬が当選し、他は落選という結果になった。落選した選手が今夜、自宅でしょげかえっている様子がありありと浮かぶが、前回の春季選手権報告書で述べた「鶴鳴バスケットには、タッチやH2（どちらも高校球児のマンガ）のような青春ドラマはありません。大学生の就職活動やアフリカのサバンナと同じ厳しい現実があるのみです。自分を売り込めない者は置き去りにされるし、相手に威圧感を感じさせない者は餌食にされます」ということばを真摯に受け止め、選抜大会での巻き返しを期待したいと思う。

【新車】

六月一〇日。マイクロバスを買った。新車だ。排気ガス規制で東京に乗り入れるのができなくなったからである。触媒装置がつけられる年式の中古を探していたが、七年落ちで三百万円のが見つかったと言われた。それに触媒装置を付けたりいろいろ手を加えていたら四百万円を超える。それなら少しお金を追加して新車がいいと思っただけだった。

学園購入ではなく個人購入である。元を取るまでに五年ぐらいかかるだろう。新車だからこのバスが査定ゼロになるまでに約十五年ぐらいかかる。それは、あと十五年間、私は運転手兼コーチを続けるということの意味している。十五年後は七八歳だ。若いコーチの方々はそれを承知で山崎つぶし作戦を練ってください。

追伸



バスのことについて話そう。私が大型免許を取得したのは二六歳の時である。その時私は長崎市立桜馬場中学校に勤めていて女子バスケットボール部の監督をしていた。強いチームを作るためには練習試合をたくさんしなければならぬ。遠征に行くたびに保護者にクルマ出しを頼むのは気の毒なので、大型免許を取得してレンタカーのマイクロバスで遠征することにしたのだ。

鶴鳴に移籍してからもそれは同じだった。しかし高校の遠征は中学より回数は多いし距離も遠くなる。そこで私は、毎回レンタカー代を払うより家用マイクロバスを持つのが得策だと考えた。最初のバスは昭和六四年だった。当時浦上タクシーの吉川社長のお世話で（初版のチームを創るにその経緯は書いてある）中古のマイクロバスを購入した。

以来、今回の新車を買うまでにシベリアン・ローザ・ローザ（いずれも中古）と三台買い替えている。すべて個人購入だ。車庫証明は自宅に充分そのスペースがある。バスを購入するのに保護者会等で購入しないのは、保護者や選手からバス代や遠征費を徴集すると、都合によって全員を連れて行けない場合に困るからである。

私は昨年（平成十六年）の四月一日付けで高校から短大に移籍した。同じ学園内の人事ではあるが、私は高校の定年を過ぎた六一歳だったので、一旦高校を退職し短大に再任用というかたちになった。だから移籍する時に退職金を貰ったのでそれで家のローンを払いきってしまった、借金は一円もなくなった。

そこでおそろおそろ嫁に聞いた。「千葉インターハイには排ガス規制装置がついたバスでないと行けないらしい。この際新車のマイクロバスを買ってもいいか？」嫁は「定期預金を一個崩しましょうか」と言っても何の波乱もなく一件落着した。フーツ。

平成十七年〇六月九州高校総体 一回戦 スタメン 高岡 杉野 泉谷 浜本 ジャトウ

【案内文書】

県総体の報告書で述べていますが、県総体のエントリーから高崎・川瀬・上田の三名が外れ、九州大会とインターハイのエントリー決め予選ラウンドに回されました。その結果高崎と上田が落ち、峰と野村が昇格し、川瀬は残留となりました。七名で予選を行い、この三名がユニフォームを獲得しましたが、それ以外に九州大会のアシスタントコーチとして一名（高崎が獲得）、補欠で一名（森が獲得）、インターハイの補欠で一名（林田が獲得）それぞれの大会に連れて行きます。

予選ラウンドに回った七名のうち六名はこうしてどれかの大会に連れて行けますが七位になった一名だけはどこへも連れて行けません。その該当者は上田ですが、現実の厳しさをいやというほど噛みしめています。まだ入学してから三ヶ月しか経っていないのだから、これをバネにしてウィンターカップで頑張つて欲しいと思います。

現実の厳しさと言えば、予選ラウンドでは第一シードの野村が峰に負け、三位決定戦でもあわや陥落かという際どい場面がありました。予選ラウンド組ではもっとも力があるので第一シードにしたのですが、一発勝負では何が起こるかわかりません。他の選手たちもこれを自分のこととして受け止め、戒めにして欲しいを思います。

また、相手チームにもこのようなことが起こり得るんだということを肝に銘じ、どんな小さな出来事でも勝機を掴む材料が見つければことごとくそれをものにし、粘り強い戦いをして欲しいを思います。

この九州大会は、インターハイに向けて手直し箇所を見出すという大会でもありますが、それより重要なのは八月下旬の九州国体を見据えた戦いであるということです。具体的には足。四〇分間走り回る試合ができません。この大会で各選手とも自分の足がどの程度かを私にアピールして欲しいと思います。

【結果報告】高岡（前半終了と同時にACL断裂）

組合せが決まってから急遽宿泊をキャンセルしました。初戦が十二時開始なので、長崎から唐津までなら当日の朝出発しても間に合う時間だからです。二日目は朝九時から試合開始なので二日目はあらためて宿泊

の予約をしました。でも、結果的にそれは不要になり、キャンセル料を取られました。

さて試合の話になりますが、鶴鳴派の人々は「高岡がケガしちゃったからねえ」と、話題をそっちに持って行きたがるでしょう。一方アンチ鶴鳴派は「いやいや、高岡がずっとコートに居たとしてもこのゲームは九州女子が勝ったよ」と言うでしょう。

客観的に見て後者が正しいです。粘り・ブレいのキレ・集中力などほんの少しずつですが九州女子がどの場面でも上回っていて、それが最後まで崩れませんでした。

平成十五年、鶴鳴はインターハイとウィンターカップともに三位になりましたが、その年の練習試合で鶴鳴は九州女子に負け越しています。「ウィンターカップ三位のチームがウィンターカップに出てもないチームに練習試合で負け越しているなんて誰も知らないよなあ」と、ウィンターカップから帰ってきたあとの正月合宿の時に私は池田先生に言いました。「君は本当にがんばっているよ」と池田先生に言いたかったからです。

池田先生は、強豪中村学園が居るために脚光を浴びることが少なく、しかも選手募集、不運としか言いようのないケガ人や病人の続出、留学生ジャーネの扱いが方などにかく苦労ばかりしています。時々冗談で「君は福留さんの波瀾万丈物語に出演できるよ」と、からかったりすることがありますが、今日の試合はそんな苦労が着実に実を結んできている証拠だと思います。

試合後、ジャトウが体育館の外で泣いていました。たぶん、自分が勝利に貢献できなかったからではなく、格下と見ていた九州女子のジャーネ（セネガルからの留学生でジャトウより一学年下）にやられたのが悔しかったのだと思います。私はそれを見て冷たく「泣くな。俺は試合に負けてなくヤツは大嫌いだ。試合で負けて泣く前に、その試合の勝者たるにふさわしい努力をしてきたかどうかを考えろよ」と言いました。

冷たいと言えば、この九州大会の行動を見ていて、インターハイのエントリーがまた一人替わりました。インターハイに連れて行くにふさわしくない選手を一人落とし、その補充を月曜日に行います。一昔前は、普通の若者がスポーツ選手を見て「がんばるとはこういうことなんだ」とか「礼儀正しいとはこういう人たちのことを言うんだ」と学んだものですが、今はスポーツ選手に現実の厳しさを教え込まなければならぬ時代です。

「仕事が出来ない人間に就職口はない」「働きの悪い社員をいつまでも雇っておく会社はない」「貢献する者のみしか未来は開けない」という現実を明日からまた教え込みます。

【選評】

九州女子は今年二月に吉岡がACL断裂で戦線離脱。森田も何とか今大会に間に合わせたとはいえ、これもACL断裂で長期のリハビリ生活を強いられた。五月の連休には富永がリフラン関節を捻挫した。この大会は大庭（現デンソー選手＝日本代表）がふとももに肉離れを起こした。主力の相次ぐ故障にもめげず、代役が頑張って福岡県予選でも勝ち抜いてきた。

それがこの試合の随所で現れた。なかでも第三ピリオドの富永の四連続スリーポイントは圧巻だった。富永は一時期戦力外通告される寸前まで追い込まれた選手だ。それがディフェンスでのがんばりで認められて復活した。前述のリフラン関節捻挫はその矢先の出来事だった。四連続スリーポイントは、苦難を乗り越えた富永への神様からのプレゼントだったのだろう。

一方鶴鳴は、ここという時に歯車がかみ合わず、突き放せるところや追いつくチャンスをごとく逃した。勝者によくおこる現象と敗者によくおこる現象がゲームを通して現れた事例と言えよう。文責 山崎

【ACL】

九州大会初戦の前半終了一秒前、ドリブルストップジャンプシュートを打ったあと膝崩れを起こした高岡の動作を一部始終見ていた私は、「ACLをバツサリやった」と思った。でも、最後の試合を見終わって長崎に帰る前に高岡の膝を診たところ腫れがない。引き出し現象も見られない。通常ACLを切った時は関節

包内の出血で膝はパンパンに腫れる。翌日（十九日の日曜日）自宅で安静にしている高岡に電話で聞いたところ、腫れはなく初日の状態と変わらないと言う。私は「直ちに氷冷圧迫した最初の処置がよかったので出血を最小限に食い止められたのかもしれないが、ACLが切れているのは間違いない」と思った。

翌日、三菱病院院長の瀬良先生に無理矢理頼み込み、割り込みでMRIを撮って貰ったところ、「前十字靭帯が少しだけ切れていて大半は繋がっている。半月板など周辺組織も何も傷ついていない」という診断であった。念のため二三日に入院して内視鏡検査と簡単な修復をし、二四日に退院してからリハビリに移るようになった。

本人の進路は大学進学希望である。進路先で迷惑をかけないように一刻も早く手術して卒業後のことに備えなければならぬから、インターハイも国体もウィンターカップも見送りだなと思っていたが、インターハイにはギリギリセーフで、国体とウィンターカップは大丈夫みたいだ。ホツとした。参考までに、高岡の関節包内出血はほんのわずかで3ccだった。完全断裂の場合、初期処置の確不的確で差があるが、関節内血腫は30ccから50ccぐらいである。

しかし、その後内視鏡による精密検査の結果やはりダメだった。ACLの鞘はすっかり残っていたものの中身がバツサリ切れていたのである。鞘は繋がっているのに、鞘の外には出血した血液も洩れないし、MRI検査では断裂映像も映らない。当初の診断にホツとしたもの一方では診断結果に納得していなかった私の勘が当たった。夏休みに手術させ、進学後のプレイに支障のないリハビリを最優先にさせる。

と、当時の記録にそう書いているが高岡の手術は十二月末のウィンターカップまで保存療法を行い、その後手術することにした。進路先の大学には入学後の半年ほど迷惑をかけるが、医師・本人・保護者・及び進路先の大学の監督と私の五者の相談の上でそうすることに決めた

【招待合宿（一）】

七月十六日～十八日 於・長崎女子短大 対戦チーム 熊本慶誠・長崎成年女子・宮崎小林

スクリメージ 十九本 十二勝七敗

コメント

試合は鶴鳴単独でやる場合と国体少年女子でやる場合の二通りでやりました。大きな出来事は、ジャトウの出来が入学以来最高だったということです。ボーナスを一万円あげました。「今回の出来に対してのボーナスであって、これまでの生意気さやいいかげんさが解消されたわけではない」という但し書きを付けて：余計な一言と知りつつ言わずにはいられませんでした。私もまだまだ未熟者です。

高岡が抜けた後、コート上の支配権を握らなければならない泉谷と前川がもう一步届きません。この二人の自覚がもう少し高まればジャトウの出来と合わせて鶴鳴はインターハイの台風の目になるかもしれない。女性騎手最多勝利を先日果たした宮下瞳さんじゃないけれど、優しい笑顔で第三コーナー過ぎたあたりから思い切りこの二人にムチを入れてみましょうかね。

後日談

この招待合宿で私は慶誠のラマをみんなの前で叱りとばした。

「お前が慶誠に居る間は二度と慶誠と練習試合はしない！」

理由は、ラマが鶴鳴と対戦する時以外は真剣にやらなかったからである。

私は鶴鳴との試合だけだと飽きるのでわざわざ長崎成年女子チームに頼んでこの合宿に来て貰った。ところが、慶誠と成年女子の試合が始まるうとする時にラマがいないのである。私はコーチに「ラマ、どうしたんだよ」聞いた。すると「おなかが痛いとか言っただけで休んでいます」とコーチは言う。私はこのセリフを聞いて激怒し、ラマを怒鳴りつけたのである。

この話しにはまだ続きがある。慶誠の選手たちを前にしてラマを怒鳴りつけているときに一人だけ泣いている慶誠の選手がいた。二年生の松枝（荒尾四中 慶誠 熊本大学）だった。松枝は、当事者ではないが慶

誠の一員として自分たちが失礼なことをしてしまったということが分かっていったのだ。今、彼女がどこでどうしているのか知らないが、もし教師になっていたら素晴らしい指導者になっていると思う。

【山口遠征・福岡遠征・関東遠征】

七月二日～三日 山口遠征 対戦チーム 山口選抜・福岡選抜・倉敷翠松・佐賀選抜・

スクリメージ 十二本 一〇勝二敗

七月二七日 福岡遠征 対戦チーム 九州女子高校

スクリメージ 七本 五勝二敗

七月二日 ジャパンエナジー合宿 対戦チーム 山形商業 札幌山の手 佐久長聖

スクリメージ 三本 三勝〇敗

コメント

七月二日から三日まで、恒例の山口遠征に行ってきました。参加したのは福岡少年女子・佐賀少年女子・長崎（鶴鳴＋国体補強）・山口少年女子・倉敷翠松高校の五チームです。鶴鳴関係だけの結果を報告します。浜本が、突然開眼しました。この四ヶ月間「殺すぞきさまあー！」といいながら何度浜本を壁際に追い詰めたでしょう。

浜本は、この合宿でボールを貰うタイミング、他人に譲るプレイ、捨てるプレイ、やってしまうプレイの区別がわかるようになったんです。発見したのは二日目でした。浜本の目がいつもと違う。それまで点しか見ようとしなかったのにこの日の試合ではよく全体を見渡そうとしている。私は急いでタイムアウトを取り、泉谷と前川に言いました。「浜本の目が変わった。ひょっとしたら変身するかもしれない。注意深く見ておいてやれ」。最終日もそれは崩れませんでした。神様！夢ならインターハイが終わるまで覚めさせないで下さい。

七月二七日の福岡遠征はインターハイ直前なので、ケガをさせないことや疲れ過ぎないように、双方気を配りながらの選手起用ですからこの合宿の勝敗は必ずしも双方の力関係を表しているとは限りません。

七月三日のジャパンエナジー合宿は、午前中松戸の聖徳大学附属高校で練習試合をしたあと、インターハイの試合会場である八千代市民体育館を下見に行きました。

長崎を出発する直前に、前川と浜本がふとももを打撲し、練習試合も様子を見ながらの起用でしたが、今日の午前中の練習試合では全員仕上がり良好。みんないい顔をして事前合宿を終えました。結果はやってみなければわかりませんが、こんな顔でみんなが試合をしてくれれば何も言うことはありません。

平成十七年〇八月インターハイ 三回戦 スタメン 杉野 泉谷 前川 浜本 ジャトウ

【案内文書】

ジャトウの高さが有利なのだからオフェンスをしっかりと組み立てて…と違ってずっとやってきましたが、それは確実性がないと分かったので六月からは方針を変えて足で勝負することにし、ジャトウはどさくさに紛れてリバウンドショットを決めたり、プロックショットやリバウンドボール獲得で貢献してもらうことにしました。

ですから、コート上を暴れ回るのは泉谷・大宥・前川・浜本が中心になります。しかし、いくらディフェンスがひどいといってもジャトウはスタメンで使わなければなりませんし、シュートが入らなければ勝てないので杉野もスタメンで起用します。だから大宥が控えに回ります。

そこで、練習ではジャトウと杉野へのディフェンスの注文が多くなります。せっかく泉谷・前川・浜本がディフェンスで頑張っても二人がルーズなディフェンスをしていたら三人の動きが徒労に終わりますから。今の段階で、この方針転換は「ヨシ！」というレベルまで達していません。チームとしてではなく個人としても欠落している部分がなかなか「ヨシ！」というレベルまで改善されません。

インターハイに突入するまで三回の遠征や招待試合をします。その間に欠落部分を少しでも埋めなければなりませんから、「ヨシー」にならなければならぬで打つ手は用意します。首都圏に乗り入れられるためにバスを新車にしたのですから簡単に引き下がってきません。

【結果報告】前川（成徳戦第二ピリオド大腿部強打。後半出場できず）

初日、みんないい顔をして試合してくれました。山口遠征の二日目（七月二日）に「おい、浜本の目付きが変わったぞ、お前らしっかり面倒見てやれ」と、泉谷と前川を呼び寄せて私はこう言いましたが、それ以来みんな気力充実した日が続いています。

二日目、今日もいい顔をして試合してくれました。相手チームのトラップを仕掛けるゾーンや激しいダブルチームにも浮き足立たず、終始安定した試合をしてくれました。六月の鶴鳴はどこかへ飛んで行ってしまったようです。

三日目、負けた翌朝五時に千葉を発ったのでパソコンをいじる暇がなく、帰崎してからの報告となりまして。したがって、三日目はホームページ上での報告ができませんでした。すみません。

さて三日目もみんないい顔で試合してくれました。特にジャトウの変貌ぶりはすばらしく、「夢ではないのか？」と自分のホッペをつねりたくなるような気持ちでした。初年度はちょっと疲れたりミスが続いたりしたら「交替させてくれ」と、ゼスチュアで私にサインを送っていたし、ほんの二ヶ月前まではゴール下のシュートを落とすとは必ずといっていいほど急いでディフェンスに戻ろうとしなかったのに、成徳戦ではオフエンスリバウンドに飛び込んだあと相手の速攻を必死で追いかけ、ブロックショットに跳んで相手のシュートを落とさせてディフェンスリバウンドを取るんです。

しかも、一息入れさせるつもりで影井と交替させようとしたら眉間にシワを寄せて「大丈夫」と拒むんです。まさに獅子奮迅の活躍でした。試合が終わったあと「すばらしい仕事ぶりだった。ありがとう」と私は素直に言いました。二日までジャトウは山梨の涼しいところで避暑休暇です。

ジャトウだけではありません。七月二日に突然開眼した浜本はずっとそれを維持してくれましたし、杉野・泉谷・前川も、相撲で言えば追いつめられた身体を土俵際親指一本で踏ん張り、何度も押し返してくれました。さらに、負傷の前川（成徳戦で古傷のふとももに再びカツが入って大腿四頭筋不全断裂）の交替で出た大宥がこれまたコマネズミのような働きぶり。みんなみんな本当によくやってくれました。

そんなにがんばったのに負けた。これは神様が「これにめげずに頑張り続けたら次は本当のご褒美をあげるよ」と言ってくれてるんだと思い、九月のウィンターカップ予選に照準を合わせたいと思います。それにして、若者というのはすごい。なにかのきっかけで大変身する可能性を誰もが秘めているということであらためて感じました。

追伸

私は、成徳のスーパースターの吉田選手をデビュー時（平成十五年の長崎ゆめ総体）からずっと見守ってきました。下級生の頃は個人技に走り過ぎる場面がしばしばありましたが、今回は全身全霊でチームプレーに徹し、すばらしいリーダーシップを発揮していました。彼女の人間的な成長ぶりにも大拍手を送ってやりたいと思います。

【選評】

見応えもある試合だった。東京成徳ではキャプテン吉田の成長ぶりが光った。もともと個人的な身体能力がずば抜けた選手ではあったが、今年はさらに人間的に成長し、東京成徳のリーダーとしてではなく、今後の日本女子バスケットボール界のリーダーとして活躍してくれるだろうと思わせるパフォーマンスを随所に見せてくれた。

一方鶴鳴ではジャトウの成長ぶりが印象的だった。昨年まではコート上をノソノソ歩いている場面が目立ったが今年はゴール下からゴール下まで常に全力で走っていた。高校スポーツというのはこれだからおもしろい。「あの選手がこんなに！」という大変化が起こるから...

文責 山崎 純男

【宮崎遠征・熊本遠征】

八月十日～十一日 小林遠征 対戦チーム 小林高校

スクリメージ 八本 三勝五敗

八月十二日～十三日 熊本遠征 対戦チーム 熊本選抜・鶴屋・神村学園・熊本学園大・国府高校

尚綱高校

スクリメージ 十四本 七勝七敗

コメント

一〇日と十一日は国体チームを引き連れて宮崎に遠征し、十一日の夕方一旦長崎に帰って十二日と十三日は熊本遠征をしました。今年の国体チームはギャツと言っほど鍛えられています。ジャトウが年齢制限で出場できないから足で勝負するという構想の中からキーパーソン高岡が六月の九州高校総体で前十字靱帯を切って戦線離脱。でもまだいける。

前川が成長したのでそう思っていたところへ今度はその前川がインターハイでふとももを傷めてまた足が四本欠けました。そこで急遽、今年は国体メンバーから外れていた純心の平川を再指名して泉谷・大窄・角（長崎商）・平川（純心）・浜本の足をベースに、副島（純心）・杉野のシュート力、それに納富（長崎西）のゲーム管理能力をうまく使って戦うという方針を立てました。

ただし、昨年の埼玉国体みたいに、困った時は高さで何とかなるジャトウや力でねじ伏せる出岐のような選手がいないので、一人ひとりが本当に「自分が主役！」という意識を持たなければなりません。ですから今回の遠征はとことん追い込みました。

「殺すぞきさまあ！」こんなせりふを他校の選手にとばす練習は今までしたことありません。今回の遠征で変わったことがもうひとつあります。上記の選手たちではあまりにも小さいので影井（一七七cm）を入れて戦うつもりでしたが、中途半端に大きいよりも足を優先させるのがいいと考え、浜本をセンター役として起用するようにしました。

理由は、小さいからといって五人ともオールアウトでやるバスケットは機能しないからです。これが面白いんです。浜本自身の脚力とシュート力も活かせるしチームの動きもスムーズになりました。たぶん読者にはイメージできないと思いますが、私自身は「ヨシ！」と思っています。

平成十七年〇八月 九州国体 リーグ敗退 スタメン杉野 角（長商）納富（純心）泉谷 浜本

【案内文書】

今年はジャトウが年齢制限のために国体には出場できないので足で稼がなければならぬなあと思っていました。しかし、全員一六〇cm台ではあまりにも小さすぎるので、影井（一七七cm）を鍛え上げて試合に間に合わせようとあれこれやってきました。でもその構想は八月十二・十三の遠征中に取り壊しました。

福岡チームのセンターは東筑紫のセネガル人留学生サリー（一八二cm）です。彼女に今の影井を立ち向かわせるのは無理があることと、サリーが徹底したインサイドプレイではなく時々アウトサイドに出てきても時々スリーポイントを打つので、小さくても足は丈夫という選手で戦った方が得策だと思ったのです。

しかし、全員一六〇cm台だといっても五人全員をオールアウトでプレイさせるのはお互いが邪魔になって機能しません。そこで誰かをセンター（鶴鳴の場合はビッグセンターでもモールセンターでもハイポストでしか使いません）役にしなければなりません。十二日の午後の練習中に突然私は「浜本で行け！」という天の声を聞きました。アウトサイドのシュート力とドライブの切れはチーム随一の浜本をセンターで使うのは、一見無謀な考え方のようですが、ボールを欲しがり過ぎる浜本を最初はスクリーナーで使っておき、機を見てアウトサイドに飛び出させるのはとても効果があります。

これまでは、ボールを貰いたいたために点しか見えなかった浜本が、ハイポストで世間を見渡してからボー

ルを貰うことによって状況に合ったプレイができるようになってきました。まだ完成までにはもう少し時間が必要ですがあと一週間、浜本と他の四人の息の合わせ方に焦点を絞り込んで練習し、本大会に臨みます。

【結果報告】

今年ほど選抜チームをたたき上げた年はありません。もちろん私の中の危機感がそうさせたのですが。

「長身者がいない」「足で勝負しなければ」「そんなことはこれまでに何回もあつたので小さい選手ばかりだというだけで焦ったりはしません」が、今年は私の戦略構想の中から高岡（ACL）が六月に消え去り、八月に入ってから前川（大腿四頭筋断裂）が抜け、ローテーションが非常に苦しくなったので危機意識を持ちました。

ローテーションが苦しくなったというだけなら、山梨インターハイのようにひとりが一人半ぐらい頑張つて戦い抜けばなんとかなるかもしれないませんが、今年のチームはローテーションが苦しくなっただけでなく、コート上の指揮官にならなければならない泉谷と前川がまだ二年生なので私との意志の疎通を欠くことがしばしばあり、「頼むぞ」という気持ちで選手をコートに送り出すことがなかなかできません。それがいつそう私の危機意識に拍車をかけました。

そういう事情なので、「頼むぞ」の役を引き受けてくれる選手を自チーム以外の選手に求めなければなりません。そこで白羽の矢を立てられたのが角（長崎商業三年）納富（長崎西三年）平川（純心二年）です。それを、八月二十六日までの間に急ごしらえしなければならぬので要求が厳しくなりました。「殺すぞきさま！」「こんな言葉を他校の選手に浴びせながら選抜チームの練習や遠征を重ねたのは今回が初めてです。

結果は皆様のご期待に添えないものとなってしまいました。今年の選手たちは私の思いを精一杯受け止めて本当に一生懸命練習してくれました。ですから、選手や母体チームや強化費については感謝こそすれ不満は一切ありません。十二名中の半分は一・二年生です。今年の練習の雰囲気をつかり自分の中に取り込み、「来年は絶対本国体の出場権を取る」という気持ちを持ち続けて練習に励んでください。

本国体に出場できないというのは、インターハイやインターカップに出られないのと違って結果の受け止め方が重いです。インターハイやインターカップはいわば私的なことですが、国体は県民や市民のさまざまな思いだけでなく、政治や経済の事情も背負っているので、「負けちゃったあ」などと簡単に済ませられるものではありません。このことは選抜チームに選ばれた選手はもちろん、それぞれの選手を送り出す母体チーム関係者及び保護者の方々には常に念頭に置いて欲しいと思います。

【戦評】

福岡は、藤吉が右手小指とくすり指にギブスを巻いていて試合に出場できない。インターハイの中村学園は六月の九州大会で足首を捻挫した中山が復調しておらず、チームのリズムもガタガタで最悪だった。しかし今大会では中山も復調し、藤吉の欠けた部分は大庭（九州女子）デンソー（日本代表）とサリー（東筑紫）が充分その穴を埋める仕事をした。

一方長崎は九州大会（六月）で鶴鳴の高岡が負傷し、インターハイで前川が負傷して、ただでさえ層が薄い上に弱り目に祟り目状態だった。

試合は両者そのような台所事情がモロに反映し、第一ピリオドで福岡楽勝の様相となった。それにしても高校生のスポーツは厳しい。藤吉は一年生の時も手を骨折して九州大会を欠場し、今回また負傷欠場だ。思い切り暴れたのは二年生の時だけ。だからといって実業団のように「引退を伸ばします」とは言えない。来春には卒業。将来日本代表となるだろうが、人生の中でもっとも輝いているべきはずの高校生時代のページに、二ページ分の空白ができることになる。辛い。

文責 山崎 純男

【福岡遠征（一）】

九月〇三日～〇四日 福岡遠征 対戦チーム 九州女子・神村学園

スクリーン 十四本 一〇勝四敗

コメント

九州国体で負けたので鶴鳴のことだけに集中しなければならない。それも、三年生を含めたウィンターカップと、一・二年生で構成する新チームの試合の二本立てである。その見極めをするのが九月なつてすぐの福岡遠征のもりだった。二〇分ゲームを七本、一〇分ゲーム七本やった。

ウィンターカップでは高岡を復帰させるつもりだが、これは戦力としてではなく、重責を担って来てくれたことに対しての慰労の意味で最後の全国大会の舞台に立たせてやるのが目的である。

インターハイで主戦力として戦ったのは杉野 泉谷 前川 大宥 浜本 ジャトウ の 人である。新チームになればこの中から杉野とジャトウが抜ける。替わりに入つて貰わなければならないのが影井（一七七cm）と磯野（一七二cm）である。この二人以外に高崎（一六二cm）も入つて貰わなければならない。ということは、泉谷・前川・大宥は両方のチームでも試合を動かす存在で、二本立てであつても役割はそのまま変わらないが、杉野とジャトウが抜けたあとに入る影井と磯野はガード陣がうまく使つてくれなければ機能しない。ところが前川はインターハイの時にふとももを打撲してしばらく練習できなし、大宥は九月になつてすぐの練習中に捻挫したがX線検査の結果内踝骨折だったので当分の間プレイはできない。

となると、今経験を積ませなければならぬ影井や磯野の見極めをするのは、この二人にその場を与えてやれないので非常に難しい。ジャトウが居るからスクリメージの勝ち星は多いが、新チームの見通しを立てるには暗雲が立ちこめた遠征だった。

平成十七年〇九月 ウィンターカップ予選 優勝 スタメン杉野 泉谷 前川 浜本 ジャトウ

【案内文書】

高岡と前川はランニングができるようになりました。

高岡のACLはおそらく完全断裂だろうと思われるのですが、鞘は完全に繋がつて残っているのがMRI検査ではわかつているので、真相を究明するには手術してみなければわかりません。手術に踏み切るにはさらに詳しい検査をしなければなりません。今やるべきことは今後何が起きてもいいように筋トレをしつかりやることです。まだ少し傷みが残っているのは骨挫傷が完治していません。

前川のケガは大腿四頭筋不全断裂です。ふとももの強打の後遺症は化骨性筋炎になるのが怖く、医師の診断でも「ひよつとしたら摘出手術になるかな？」だったのでそれが免れ、九月一日現在で膝関節は完全屈曲できるようになりました。今では両者ともトレーニング室でバイクとランニングマシンを使つてリハビリができる状態になっています。

エントリー表にはこの両者の名前を挙げていますが二人ともこの試合で使う気はありません。二人を抜いてもなんとか予選を切り抜け、もし予選を突破できたら本番で思い切り暴れて貰いたいと思っています。使わないのに両者をエントリーしているのは、予選突破後本大会の申込みをする際に「予選では上級生を使つておきながら本大会では下級生だけで参加するのはまかりならん」という申し合わせ事項に抵触するからです。

全員が健康であればインターハイの時のような試合ができます。では鶴鳴バスケットボールのレベルがそこまで到達しているのかというとそれは違います。あの時は個々の選手の弱点を隠し、長所を繋ぎ合わせ、そしてジャトウの高さを活かしながら戦つたのであのような試合が出来たのです。まだまだやらなければならないことがたくさんあります。中でも一・二年生はもちろん三年生も含めて、習う 理解する 実践するの繰り返しを数多くやらなければなりません。

その中でも急ぐのは「様相の理解」です。戦いの様相が分からないので今持っている自分の力を活かさない。こんな選手がたくさんいます。その段階から誰か一人でも抜け出せる選手が居たら、芋づる式に一気に解決するのではないかと思っています。

【結果報告】

ひどい試合でした。

立ち上がりからまったくピリツとしたところがなく、ゴールを決めたあと相手にビユーツとゴールしたままで走られてアツという間に点を取られる。そんなことが何度もありました。インターハイで東京成徳に最後まで食いがつた鶴鳴バスケットはかけらも見せてくれませんでした。

私のもっとも気を使ったのが前川の起用です。案内文書にはランニングができるようになったけど試合に出す気はありませんと書きましたが、その後急速回復して大会直前のスクリメージには参加できるまでになりました。大助かりなのですが、私のホームページの日々の出来事に「喜びすぎ、張り切り過ぎたあとのアクシデントは怖いという経験はこれまで何度も経験してきた」と書いたとおり、安全と思ったら前川をすぐ引込め、苦しくなりそうだったら再びコートへ、という起用を繰り返しました。

ところが決勝戦は、他の選手がごとくパフォーマンスダウン。前川を気遣うどころか試合全体を私がコントロールしなければならなくなりました。それも、プレイの内容を指示しただけでは回復する気配を感じません。解決の糸口を探し求めながら試合の成り行きを見つめていた私は、第二ピリオドに「元気の素は自分で作れ！」ということばを見つけました。

選手に責任を押しつけた無責任発言のように聞こえるかもしれませんが、ディフェンスでもリバウンドでも、単に走るということでもいいから、「ヨシ！」とか「ナイス！」とか「今の私がんばったぞ！」と自分で思えるプレイをすれば本来の自分を引っ張り出すきっかけができる。そこから再スタートしようという意味を込めています。采配の難しい試合でした。

【戦評】

長崎商業は伸び伸びプレイしていた。

一方鶴鳴は表情も動きも冴えず、ディフェンスへの戻りが遅いのを衝かれて、なんとかゴールしてもあつという間にベースボールパス一発で仕返しをされる場面が続いた。

勝負が動いたのは前半終了間際の二分間だった。鶴鳴のディフェンスが少し厳しくなり、長崎商業の攻撃のリズムが崩れて鶴鳴に連続速攻を出させてしまった。

後半開始早々、両者とも前半終了時の状態を引き継ぎ、あつという間に二〇点差となった。あとは点差が開き過ぎておもしろくない試合になるだろうと思われたが、第四ピリオド開始早々鶴鳴の泉谷が転倒して頭を床に強打し、退場したのをきっかけにまた試合の様相が変わった。

高岡・泉谷・大宥がコートに立てない。コートに居る唯一のガードは前川のみ。その前川もインターハイで負傷して以来一ヶ月半の休養とリハビリを経ての復帰。当然相手はゾーンプレス。しかし勝負をひっくり返すには時間が足りなかった。

平成十七年一〇月 県総合選手権 二位 スタメン 泉谷 前川 浜本 高崎 ジャトウ

【案内文書】

おとなのチームはかけひきがうまいので、こういう試合を経験させるのはバスケットの勉強をさせるにはとてもいい機会になります。ですから、日程の都合がつきさえすれば毎年出ることになっています。

チームの状態ですが…

高岡は直進ダツシユや直進のストップジャンプはできるようになったし、大腿四頭筋の筋力は健側と同じまでに回復したのですが、左右のキックやストップにまだ少し痛みと不安感が残っています。

前川は急速回復したもののインターカップ予選では本来の半分程度しか仕事ができませんでした。しかし、後遺症はありませんから練習を重ねていけば本来の姿に戻ってくるでしょう。

泉谷はインターカップ予選の第四ピリオドに転倒して側頭部を床で強打し、その後試合には出ませんでした。足首の内踝骨折の大宥はギブス固定中なので戦列復帰はまだまだあとです。

故障者の具合はこのように最悪の時期を抜け出しつつありますが、下級生の育成に手間取っています。スクリーミーや公式戦を通して試合の様相を少しでも早く理解させ、出場させる試合のレベルを上げたいのですがなかなかの難工事です。下級生の中でも浜本だけはスタメンで使っています。では浜本だけは試合の様相の理解が他の選手より優れているのかとそうではありません。筋力とスピードがあるから「そうじゃないだろう」というプレイも結果オーライになるのであって、試合の様相の理解レベルは他の選手と同じです。今回はこの一年生たちをできるだけ長く使ってバスケットを勉強せたいと思っています。

「一年生の頃は元気さえあればいいよ、細かいことは言わない方がいい」という考え方がありますが、元気も筋力もスタミナも、バスケットが理解できていなかったら無駄使いに終わるし自滅プレイに繋がります。ですから私は「若いうちは元気があればいいよ」という考え方には賛成できません。難しい理論を一年生には要求はしません。簡単に基本的な観点や感じ方を身につけることしか要求しないのですから「私がその先陣を切つてやる」と思つて一年生はこの試合に臨んで欲しいと思います。

【結果報告】高岡（ACL保存療法中）杉野（イギリス研修）大宥（内踝骨折リハ）

思わぬ急速回復でチームに合流したもののまだまだ体力も読みも勘も半額程度の前川、ウインターカップ予選で転倒し、頭と腰を床で強打して五日間まったく練習していないままの泉谷、二八日からジャンパーズ二ーのために休養している浜本と、外回りの主力選手はほぼ全滅状態でこの大会の初日を迎えました。でも幼稚さを抜け出すという目的でおとな相手の試合に参加するのですから「ボチボチでいいよ」というわけにはいきません。

中でも、様相が分かるという段階まで急いで引き上げなければならぬ泉谷・前川・浜本・影井は一秒でも長く試合に出して勉強させなければなりません。この四人に加えて「もういちどこの子を試してみようかな」と思つて使い始めたのが高崎。それに磯野を加えた六人はなんとしてもウインターカップまでには全国ベスト八ぐらいのチーム相手に使えるレベルまでにしたいのです。でも、二日目までの出来は「まだまだ遠いな」というのが実感でした。

最終日は一週間空きました。その間ずっと、浜本のためにランニングスルーばかりやってきました。昨日神村学園が一泊二日で合宿に来ましたが、神村とのスクリーミーではランニングスルーの成果をはっきりと見ることができました。しかし、ストレッチとの決勝戦ではそれが付け焼き刃だったことが見事に暴露されました。相手には見破られてオタオタするが、こちらは相手を見抜けないので思うがままにあしらわれました。そのレベルを一刻も早く抜け出したいのでおとな相手の試合に参加させたわけですが、泉谷と前川も世間の情勢がわかるまでには時間がかかります。ランニングスルーはこれからもずっと続けますが難事業となりそうです。

【戦評】

一年生はいくら身体的に素質があつても肝心なところで若さを暴露する。二年生？ウーン…中には一年生の時と比べてずいぶん成長した者もいるが大半は一年時に少し色が付いただけだ。

が、将来伸びる選手というのは下級生時代にミスの連発でチームメートにずいぶん迷惑をかけるが、一方では将来に楽しみを抱かせてくれる何かを時々見せてくれる。楽しみを抱かせてくれる何かとはプレイだけではない。目付きや態度、ある瞬間に見せる表情などいろいろある。

決勝戦の相手のストレッチの大ベテランたちに翻弄された鶴鳴の若手たちの心の中に何が残つただろうか？彼女たちの表情や態度やプレイからは読み取れなかった。心の中に残つたものは不安か？それとも自分のふがいなさに対する怒りか？それによって明日からの練習が充実したものになるか単なる時間の浪費になるかが決まるだろう。

【福岡遠征（二）】

一〇月二日

福岡遠征

対戦チーム

福岡大学・九州女子

二二日（土）は、福岡大学・九州女子高・鶴鳴の三者でスクリメージをしたが、午前中で打ち切った。九州女子は主力の二人が国体で不在だし、福岡大学は午後から補講で主力選手が欠けるからだ。仕方がないで鶴鳴の選手たちは午後からキヤナルシティでショッピングをさせた。私は宿舎で読書（首切り朝〓小島剛夕著・みゆき〓あだち充著）。選手たちにとっては思わぬリフレッシュタイムだった。

二三日は予定通りスペースワールドへ。私は例によって選手たちと行動は共にしない。デジカメを高岡に預け、施設内の喫茶店でコーヒーを飲みながら読書の続きだ。小島剛夕の首切り朝五・六巻とあだち充のみゆき六〓九巻を読破した。

スペースワールドでは目玉のタイタン（落差六〇呎のジェットコースター）とビーンズ（宙返り二回のジェットコースター）に乗れなかったのは高岡一人だけ。高所恐怖症だそう。高岡はまず、メルヘン村（嬉野にある六才児以下専用の遊園地〓テントウ虫コースターや、トーマスなどがある）を制覇してから次のレールに挑戦だ。

平成十七年十一月 九州総合選手権 一回戦 スタメン 泉谷 前川 浜本 高崎 ジャトウ

【案内文書】

この大会の予選である長崎県総合選手権大会で鶴鳴はストレッチに負けました。際どい試合になったとしても負けはしないだろうと思っていましたが負けてしまいました。試合はずっとストレッチがリードしていましたが、それでも何度もひっくり返すチャンスはありました。が、「よし、これで捕まえたぞ」という場面をことごとくイージーミスで失い、自滅してしまいました。

その一週間後が長崎地区新人戦でしたが、これは県総合選手権とは別チームのようなすばらし試合をしました。どんなに練習をしても一週間でこれほど力がつくことはありません。ということは、鶴鳴バスケットは、高岡や杉野以外の主力下級生は、相手に先手を取られたらオタオタするし、逆にこちらが先手を取れば思う存分暴れることができるという両極端を行ったり来たりしているレベルなのだと思います。

初戦の相手の熊本鶴屋は九州の実業団ではトップレベルのチームです。普通に戦えば勝てません。ですが地区新人戦の時ぐらい周りの選手が動いて、そこにジャトウが加われば食らいついて行く時間が長くなると思いますが、そこに何か手が生じれば鶴屋を慌てさせることができるかもしれません。

高校生相手では、公式試合であつても練習試合であつても鶴屋の選手たちは「勝つて当然」という重圧を背負って戦わなければなりません。そんな状況の中では「試してみる」という気分にはなれません。試してみるというのは「この子のドリブルをスタイルしてみようか」とか「この子ディフェンスが甘そうだから抜いてみようか」というような思いのことです。

高校生相手の試合では「無理なことを仕掛けて墓穴を掘ってはいけない」とか「ここでシユートを打って落としたらどうしよう」という考えが先に立って無難に切り抜けようという心理がどうしても先に働いてしまいます。そんな重圧をあまり受けず、思いきった実験をできるという意味でこの大会に参加することは、特に鶴鳴の若手にとっては重要なことです。縮こまらずに思い切って自分のすべてを見せる試合をしてくれたらいいなあと思っています。

【結果報告】高岡（ACL保存療法中）大宥（内踝骨折リハ）影井（足首捻挫）磯野（足首捻挫）

一〇月九日（日）、この大会の長崎県予選でストレッチに負けた時は本当に「皆殺しにしようか」と思うほど腹が立ちました。その一週間後の長崎地区新人戦では「これが一週間前と同じチームか？」と思うような見事な試合を見せてくれました。この二大会で大宥・浜本・影井・磯野が立て続けにケガをし、「なんとなかなるかもしれないぞ」と思い始めたのに、「なんだよ一番大事なときに…」と、がっかりさせられもしました。

そんなこんなで臨んだ今大会ですからどんな結果になるのかまったく予想が付きませんでした。が、戦い

終わった感想は「地区新人戦はホンモノだった」と思っています。だからといって、満足しているというわけではありません。どちらかと言えば「面白くない！」という気持ちの方が強いです。

どんな戦いができるのかわからないまま臨んだ大会でしたが、

第一ピリオド終了時「どこまで就いていけるのかなあ」

第二ピリオド終了時「なかなかがんばるじゃないかみんな」

第三ピリオド終了時「いけるかもしれないよこれは」

そう思いました。

で、第三ピリオド終了後のインターバルの時に私は「ここまで来たら勝ちたいなあ」と選手一人ひとりの見を見ながら言いました。その時私は「これは俺の気持ちというよりも当事者であるお前達が強くそう思っているだろう」と思いました。そして、さだまさし氏が本校に講演に来てくれた時に全校生徒の前で話してくれた「強い思いは叶う」をクレインズの選手たちが実演してくれるはずだと期待しました。それがわずか四分後に失速したので「面白くない！」なのです。でも、強くなつたのは間違いありません。

【戦評】

観戦する人たちにとっては面白い試合だったろう。が、監督としては面白くない試合だった。試合がもつて来た時は、しっかり得点を取る方法を持っているチームの方が有利である。しっかりした方法の中でもっとも有利なのはかいセンターを有していることである。その点ではジャトウを抱えている鶴鳴の方が有利である。

実際、それが効果的に機能していたから第三ピリオドまでは試合がもつれた。しかし鶴鳴には、若さという弱点がある。それが第四ピリオド残り四分過ぎに出た。鶴屋がそこを見逃すはずがない。ほんのちょっとした鶴鳴の安易なプレイに付け入り、一気にたたみかけて鶴屋が勝利をもぎ取った。 文責 山崎 純男

三 ミヤー

平成三年の三月はじめ、体育教官室の窓を開けて空気を入れ換えていたら、子猫がヨタヨタしながら入ってきた。両手ですくうとすっぽり収まるぐらい。大きさを推定すると生まれて一ヶ月も経っていない。たぶん、飼い主が捨てていったのだろう。痩せてヒョロヒョロしていた。抱き上げて名前を聞いた。

「おまえ、名前はなんていうんだ？」

「ミヤー」

「おー、そっかミヤーか、ミヤーっていうのか」

「びっから来た？」

「……」

「きつと飼い主に捨てられたんだな」

腹を空かしているだろうと思って牛乳を買いに行き、皿に移してやるよビチャビチャと音をたてて舐めた。三回ぐらい継続してやったらやっとなじまった。お腹が満たされるよソファアの上によじのぼり、姿勢を丸く整えてから寝た。最初は飼ってやる気なまじったくなく、腹を空かしているだろうと思って牛乳を「ええただけだった。が、翌日の朝学校へ来るよミヤーはちゃんと教官室の前で私を待っていた。それで、また同じことを繰り返す。

そんなことで数日過ぎると、もう情が移ってしまふ。外で寝るのは寒いだろうというので、帰る時は教官室に入れて帰る。翌朝来るよミヤーはちゃんとソファアで寝ている。そのなると夜オシッコをする時は困るだろうからミヤー用のトイレを教官室の中に設置しなければならない。器と猫砂を買いに行き、トイレを作る。猫は大よりも頭は悪いがきれい好きだから、トイレのしっけは大よりも楽だ。すぐにトイレの習慣はついた。

次は夜間の出入りだ。我々が帰ってから翌朝まで、じっと一人で教官室に居るのも退屈だろう。猫は夜行性だから夜は散歩をしたいにちがいない。そこで、教官室の窓の端っこを改良し、一〇センチ四方のリバーシブルド

アーを作ってやり、そこから自由に出入りできるようにした。そのドアから出入りするには、真下に花壇があるからそれをいちいち飛び越えなければならぬ。それは面倒だ。そこでミヤー専用のドアから花壇の端まで、専用階段をこしらえてやった。こうしてとうとうミヤーは、体育教室に居着いてしまった。

その年の秋、私はミヤーを動物病院に連れていった。まだ充分おとなに成りきってなかったが、不妊手術を受けさせるためだ。ミヤーはメス猫だった。学校周辺には野良猫がうようよ居る。もしミヤーがこどもでも生んだらやっかいだ。私はミヤーを学校で飼うことは心配だった。学校側から「学校で飼うのはやめてください」と言われはしないかとビクビクしていた。だからミヤーのことでクレームをつけられるようなことは一切ないように気を配った。それで、不妊手術も早めたのである。

ミヤーが二回目の入院をしたのは平成九年の秋だった。散歩から戻ってきたミヤーのシッポが半分ちぎれかかっている。たぶん、ドアか何かで挟んだのだろう。すぐに病院に連れて行って縫合してもらったが結局、数日経ってからシッポを切断する手術を再度受けた。傷が大きすぎて傷から先が腐り始めたのだ。それで、二〇センチ以上あったシッポが七センチくらいになってしまった。それでもちゃんとシッポの役目は果たしており、昼寝の最中に「ミヤー」と呼ぶとシッポをパタパタして返事をする。

ミヤーが引き起こした事件は数え上げればきりが無い。きりが無いが、例えばどこかの台所からサンマを盗んできたとか、何かを壊したとかいう事件ではない。すべて自分に関わる事件だ。ミヤーはみんなにかわいがられるから、学校中どこでも出入りする。侵入したのを知らずに誰かがそこを閉め、翌朝人が来るまでそこにミヤーは閉じこめられたままになる。そんなことはしょっちゅうだ。最初は「ミヤーが帰って来ない」というので遅くまで探しまわることがしばしばあったが、そのうちこつちも慣れて「またどっかに閉じこめられているんだろ。朝には帰ってくるよ」といつて心配しなくなった。

声はすれども姿が見えない。それで探し回って救出したのが三回ある。すべて高いところに登って自分でもどつすることもできずにいた事件だった。一回目は平成六年の夏だった。練習が終わって帰る頃、ミヤーに声をかけると遠くから返事が返ってきた。演劇部室あたりだ。捜すけどわからない。何回も呼ぶ。ひょいと上を見上げると、天井のハリにちょこんと座って身動きできないミヤーが見えた。登った通りの道準で戻ればいいのだが猫にそんな知恵はない。私はギョラリに上がってミヤーを呼んだがミヤーは動かない。そこで、もし落ちたときのためにミヤーの真下に器械体操用のスポンジマットを敷いて救出に向かった。私もハリを登ってミヤーをつかまえようというのだ。ひとりでは大変だから林田先生(陸上部監督)の応援を頼んだ。夜の九時頃、林田先生はクルマでかけつけてくれた。救出されたミヤーは、私の肩にしっかりとまつて震えている。床に下りてもまだ震えが止まらなかった。

二回目は平成八年。体育館の玄関前の、メタセコイアの木に勢いよく駆け登ったがまた降りられない。猫は登りは得意だけど降りるのは苦手なのだ。この時は梯子を用意して救出した。三回目は平成十一年の四月。夕方ミヤーを呼ぶと、声はするが姿は見えない。声をたどっていくと、今度は地面近くから聞こえる。声は、体育教室の左端にある雨樋の中から聞こえてくるのだ。「えらく狭いところに入り込んだもんだなあ」と思っている。選手のひとり、ミヤーが体育館の屋根をつらつらしているのを発見した。屋根でなっていたミヤーの声は、雨樋を伝って地面から聞こえていたのだ。またしても梯子だ。幼稚園の庭から体育館の屋根まで、梯子を渡して無事救出した。

若い頃のミヤーはよくモグラを捕まえてきた。食べはしないのだがオモチャにして遊ぶのだ。昔、グラウンドは今のような人工芝ではなくて土だった。その土手でモグラを捕まえる。それをわざわざ体育館の玄関まで持って来るのである。誉めてもらいたいからだ。ある日、私はミヤーを抱きかかえて「ミヤー、よく捕まえたねえ、おりこうだねえ。でももういいよ。モグラ、逃がしてやるよ。かわいそうだ」と言いつて、地面でよろよろしているモグラを「ほら、はやく逃げる。もう捕まるなよ」と言いながら、足で押して茂みの方に逃がそうとした。しかし



そのモグラは、私の足で押されて転がった拍子に心臓マヒを起こして死んでしまった。

小鳥もよく捕まえてきた。これも、食べるのではないがゲームとして楽しんでいたようだ。一度だけ現場を見た。テニスコート横の草むらにはしばしば小鳥が虫を食べに来る。そこへミヤーが忍び寄るのだ。至近距離まで近付いたらミヤーが突然ダツシユする。小鳥は驚いて飛び上がる。その飛び上がる瞬間と方向を見事に読み、地上ーメートルくらいのところで引つ掛ける。それは見事な名人芸だった。ミヤーはまた、体育館で椅子を並べた集会が大好きである。椅子がたくさん並んでそこに人が集まるとはしゃぐ。だから卒業式や入学式はシャワー室に閉じこめなければならぬ。(このまでは平成十二年二月十一日に書いたミヤー物語「山崎純男のホームページ」にも掲載)

平成十七年十二月十七日十九時十二分、ミヤーが息を引き取った。十一月中旬に引いた風邪がなかなか抜けず、加えて重症の口内炎で食事を取ることができず、日に日に衰弱していった。三根動物病院から抗生物質をもらってきたが呑む気力も体力もない。前年の同時期、鼻器官炎で生死の間をさまよひ、長期入院の果てに生還したが、そのときずいぶん体力を消耗していたようだ。今年 は保たなかった。

前夜は高校の体育教官室に寝袋を持ち込み、ひとりで通夜をした。十七日の朝一〇時、第二体育館横の斜面に埋葬した。前夜臨終に立ち会ってくれた古賀先生(新体操部監督)から訃報が回っており、西村先生・松田先生・宮下さんがかけつけてくれ、新体操部とバレー部の選手たちも参列してくれた。

鶴鳴の先生方のみならず、本校を訪問されたすべての方々に「ミヤー、ミヤー」と言っただけでかわいがってもらい、本当に幸せな一生を送れたと思っっている。

今思えば、十五日(木)の夕方ミヤーは私にお別れに来たんだと思う。この二週間体育教官室からほとんど出ず、水を飲むときだけ起きてあとは寝てばかりだったミヤーが、体育教官室の奥にあるシャワー室で私がシャワーを浴びていると、そこまでよたよた歩いてきて「ミヤー ミヤー」と、近頃出したことのない大きな声で鳴くのだ。

「ミヤー、どうしたんだよ。寒いよここは。戻って寝てなさい」と言っただけで教官室の電気ストーブの前に敷いてある座布団の上に連れて行き、私はシャワー室に戻って身体を拭き、着替えて教官室に戻った。するとミヤーがいない。寒いのでドアは開けていないし、外に出るとすればいつものミヤー専用出入口から外に出る以外に方法はない。そこは踏み台を使ってよじ登るかジャンプしなければ届かない出入口だ。しかもその日は日本列島を猛烈な寒波が襲った日である。

「ミヤーが危ない」そう思った私は、部活が終わって帰り支度をしている部員に探させた。しかしどこにも見当たらない。翌日の昼、運動部室前で動けなくなっていたミヤーを生徒が見つけ、体育教官室に連れて来てくれた。が、もう立つことすらできない状態だった。それから一気に容態が悪くなり、土曜日十九時十二分に息を引き取ったのだ。

そんなに弱っているのどうしてシャワー室まで来て、そのあと寒風吹きさらば外に敢えて出たのか…。私にはミヤーが私にお別れのあいさつに来たんだとしか思えなかった。しかも、今年最後のビッグイベントであるウィンターカップに出発する前に。たぶん、私に気がかりを残させないように気を配ってそうしたんだと思う。



十八日、三年生にとっては最後の五千走。そして、体育館の中ではスクリメージを二本やってウィンターカップ前の練習を、高岡復帰・高崎成長・上田成長・ケガ人すべて復活というおまけつきで終えた。明日出発する。ミヤーの気配りに私のすべてをかけて報いたいと思う。

四 膝崩れ (GIVING WAY)

【招待合宿 (二)】 於 鶴鳴

十二月一日、十一日 対戦チーム 慶進・佐賀清和

スクリメージ 十一本 一〇勝一敗

コメント

高岡のボックススコア 一〇日 対慶進一試合目 二〇分中 十一分出場 得点〇 反則〇

一〇日 対慶進二試合目 二〇分中 十二分出場 得点〇 反則一

一〇日 対慶進三試合目 二〇分中 〇一分出場 得点〇 反則〇

以後全スクリメージ欠場。しかし、ウィンターカップまでには復帰するだろうし戦力に影響はない。高崎・上田は一時期戦力外通告を受けたがこの一ヶ月で再び浮上。この二人のローテーション入りは大きい。

平成十七年十二月 ウィンターカップ 二回戦 スタメン 高岡 泉谷 前川 高崎 ジャトウ

【案内文書】

ホームページの日々の出来事にも書きましたが、十二月になってケガ人が次々と復帰してきました。まだ全員フルメニューというわけにはいきませんが、やっぱり主力選手がコートに居るとチームに活気が戻ってきます。なんとといっても大きいのは高岡がスクリメージに参加できるようになったことです。高岡より速いし、高岡よりシュートが入るし、高岡よりディフェンスが強いという選手はほかに居ません。しかし、高岡ほど試合を落ち着かせてくれる選手はほかに居ません。心強い味方が戻ってきてくれました。

九月から十一月にかけて、高岡 (ACL)・前川 (筋断裂が治ったあとまた重症捻挫)・泉谷 (ウィンターカップ予選で転倒して腰部打撲)・大窄 (内踝骨折)・浜本 (ジャンパーズニー)・影井 (捻挫)・磯野 (捻挫)・ジャトウ (タクシーのドアに右手親指を挟んで骨折)と、入れ替わり立ち替わり練習から外れ、一時期主力選手では杉野と泉谷だけしかないという状態がありました。辛かったです。

ところがよくしたもので、この間に補欠組から主力組に食い込んできた選手が出ました。高崎と上田のふたりです。上田はまだ試用期間中ですが高崎は本採用です。前川は浮いては沈み浮いては沈みを何回も繰り返してきましたし、高崎はもう少して浮くところを堪えきれずに溺れてしまったことが何度もありました。ふたりともここでホンモノになって欲しいと思います。

このウィンターカップでジャトウが鶴のユニフォームを着るのは最後になります。三年間手こずりました。がそれはそれ、これはこれ、ジャトウに「日本に来てよかったね」と言える試合にしてやりたいと思っています。本音です。

【結果報告】 大窄 (骨折なかなか治らずり八中)

「一日毎にメールとホームページで報告します」と、初日に書きましたが二日目でおしまいになってしまいました。二日目の試合は、始まったとたん「重い」と感じました。選手たちはまるで鉛の靴を履いて走っているようです。気後れしているわけでもないし、力み過ぎているわけでもなく、舞い上がっているわけでもないのですが重いのです。

私はチームをその状態から抜け出させるべく、ありとあらゆる手を打ちました。ディフェンスはマンツーマンから二・三ゾーンに変え、時折一・三ゾーンも使ったり、選手交代や声かけにも細かく気を配りました。でもダメでした。

私が「甘かったな」と思ったのは高岡効果への期待です。今年のチームは精神面でしっかりしたものを持たないままずっとやってきましたが、十二月になってキャプテン高岡がコートに戻ってきたことでそれがかなり緩和されると思っていたのです。

高岡は個人的には「ここまでやれるようになったのか」という働きをしてくれましたが、高岡の踏ん張り
と私の知恵だけでは試合運びを立て直すことはできませんでした。もうひとり、高岡の片棒を担ぐ相棒（半
人前でもいいのですが）が必要でした。それも、育成を怠っていたわけではなく、間に合わなかったのです
から仕方ありません。

新チームは泉谷をキャプテンにして、一月三日の招待合宿から始まります。あと何年生き延びるかわかり
ませんが、残る人生をどこに出しても恥ずかしくない国産車作りに専念したいと思います。

追伸 試合中に何度も膝崩れを起こした高岡は年が明けて一月一〇日に手術します。

【戦評】

一回戦 対津幡

手に汗握る試合だった。どちらの身内も寿命が縮まる思いだっただろう。

試合時間残り六分、鶴鳴がマンツーマンディフェンスを二、三ゾーンディフェンスに変えたとたん、それ
まで伸び伸び攻めていた津幡の足がパタツと止まり、単発のアウトサイドシュートだけになった。予定の中
にあつたゾーンディフェンスではなく、やむを得ず布いたゾーンディフェンスだったが結果的にそれが効い
た。これより早いタイミングでゾーンディフェンスにしてもダメだっただろうし、これより遅くても手遅れ
になつたと思う。

文責 山崎 純男

二回戦 対仙台聖和

聖和学園は持ち前の速い攻めで主導権を握った。

一方鶴鳴はゲーム開始から動きが重く、またボールを持った選手と他の選手の思いのズレがしばしばブレ
イ上に現れ、ギクシャクした試合運びが続いた。

が、試合が一方的に聖和ペースで進められたわけではない。悪い流れではあっても鶴鳴には「これで捕ま
えたか！」と思わせるチャンスが数回訪れた。しかしそのことごとくがリングに嫌われ、チャンスをものに
できなかった。接戦ではあつたが観客にとつても重苦しい気分になる試合だった。

文責 山崎 純男